

宝鶏強人墓における葬礼の差異とその変化

角道 亮介

要旨 宝鶏強国墓地の出土青銅器に対する検討を行い、強集団と西周王朝との関係性について考察を行った。強国墓地の各墓は報告書によってそれぞれ時期が与えられているが、本論文では基本的にはこの時期区分に従い、青銅器の編年を中心に若干の修正を加えて、強国墓地について3期を設定した。この3期区分を利用して、強国墓地出土の青銅葬器の出土点数と青銅武器・青銅工具の出土状況とを合わせて考えることで、当墓地の被葬者を首長階級・貴族階級の男性墓と女性墓とに分類し時期ごとの変化を追うことが可能となる。強国1期の段階では首長墓・貴族墓ともに規則的な配置を見せるが、2期以降、その規則性は崩れる。また、強国墓地出土遺物の系統性について検討すると、王朝系・四川系・在地系の三系統が指摘できる。この三系統の時期ごとの推移という点に注目すると、四川系の漸次的な減少と3期における王朝系の増加という傾向を読み取ることができた。これら強国2期から3期にかけての変化の背景としては、王朝礼制を積極的に利用しようとした強集団支配層の意志があったことを強く認識すべきである。

はじめに

『史記』の記述によれば、周は紀元前11世紀ごろ¹⁾、殷の帝辛紂を牧野に破って成立した王朝である。中国古代においては「夏」王朝²⁾・殷王朝に続く三代目の王朝であり、考古学的な観点に立てば、陝西省関中盆地に起源を持つ、いわゆる先周文化の担い手であった人々が、東の河南省安陽に拠点を持った殷系の文化に代わり中原地域に広く周文化を浸透させていった時期である。西周時代に続く東周時代には各地で領域国家が誕生し領域の拡張を求めて互いに抗争が行われたことが『史記』他の史書に記され、さらに続く秦代にはそれらを統合する形で統一王朝が誕生した。いわば東周～秦代にかけては古代国家の成立期であり、その統一の原動力は東周時代の領域国家にあった。一方で、それに先行する西周時代の社会がどのような様相を呈していたのかに関しては、これまで資料の不足もあってあまり省みられることは無かった。領域国家へと発展してゆく諸侯国、あるいはそれに準ずる諸集団が西周時代にも存在していたはずであり、それらが王朝との関わりの中でどのような特徴を持ち、また変化していったのかを検討することは、西周時代を理解するために重要な位置を占めるものと考えられる。

西周諸侯墓のうち発掘調査によってその全体像を把握することができる墓地として、陝西省宝鶏強国墓地がある³⁾。強に関する記述は既知の文献や金文中には全く見られず、その点で西周時代の一集団としての強の情報は極めて少ない。一方で、強国墓地は盗掘の被害をほとんど受けておらず、遺物がほぼ完全な形で出土したという点に大きな意義があり、西周時代諸侯の墓地を出土遺物から総合的に解釈するために、非常に有効な材料を提供している。本稿では、出土遺物に対する検討を通して強集団の性格を二つの点から考察してみたい。ひとつは強国墓地内での出土遺物の格差とその変化とに注目し、当墓地における男女埋葬の制度とその変化を読み取ること。もうひとつはそ

の変化を西周王朝との関係性の中で位置づけることである。

1. 強国墓地の発見とその概要

西周王朝の中心地があったと想定されるのは関中平原東部に位置する豊鎬遺跡、すなわち現在の陝西省西安市周辺と考えられている。この、西周王畿とも言える関中平原の西端に位置する陝西省宝鸡市から、「強」を担った集団の墓地が発見されたのは、1970年代半ばであった（図1）。

宝鸡市周辺からは、清代に既に虢季子白盤などの青銅器が出土した記録があり⁴⁾、西周時代遺跡が集中的に存在することは以前から注目されていた。強国墓地に対する本格的な調査は1974年の茹家荘車馬坑に始まり、以降1981年までの間に、紙坊頭・竹園溝・茹家荘の三地点で西周時代の大規模墓地が発掘されている⁵⁾。紙坊頭は宝鸡市の西部、渭河の北岸に位置し、竹園溝と茹家荘はどちらも宝鸡市南部、秦嶺から渭河へと注ぐ清姜河の南岸に位置する（図2）。これらの墓地がどれも強集団の墓地として認知された理由は、紙坊頭一号墓から「強伯」、竹園溝墓地から「強季」、茹家荘墓地から「強伯」という銘文を持つ青銅器がそれぞれ検出されたためであり、このことによって西周時代宝鸡市周辺に「強」という集団が存在していたことが初めて明らかになった。この強に関する発掘成果は数次にわたって報告され（宝鸡市茹家荘西周墓発掘隊1976；宝鸡市博物館・渭濱区文化館1978；王1980；宝鸡市博物館1983；盧・胡1983b；胡・劉・李1988）、後に報告書『宝鸡強国墓地』（以下、『強国』とする）としてまとめられている（盧・胡1988）。

（1）紙坊頭墓地

強国墓地を構成するのは紙坊頭・竹園溝・茹家荘の三箇所の墓地であるが、紙坊頭では大型墓が1基確認されるのみである（紙坊頭1号墓、BZFM1）。唯一確認されたこの1号墓も崖の崩落によって発見されたものであり、副葬遺物の一部は発見時点で既に失われていた可能性が高い。

BZFM1出土の青銅器のうち、「強」銘を持つものが二点確認されている。簋BZFM1:6は蓋内側に銘文を持ち、「強白乍寶罍啓」（強伯、寶罍啓を作る）と記される（図3-1）。強銘を持つもう一点の簋BZFM1:7は器内底部に銘を持ち、同じく「強白乍寶罍啓」（強伯、寶罍啓を作る）と記される⁶⁾（図3-2）。「強」字は「強」字の異体字とされるため、当墓被葬者が「強伯」、すなわち強集団の支配階級にあたることを示す重要な証拠となっている。

（2）竹園溝墓地

竹園溝墓地では計22基もの西周大型墓が確認され、その多くが後代の攪乱を受けていない状態であった（図4）。全ての墓が長方形堅穴土坑墓であり、他の西周大型墓で確認されるような甲字形墓、中字形墓は見つかっていない⁷⁾。22基のうち、13号墓（BZM13）、7号墓（BZM7）、4号墓（BZM4）は特に大型で、中央に主体被葬者を埋葬し、その左隣に副次的な被葬者を埋葬する（図5）。『強国』

宝鶏強人墓における葬礼の差異とその変化

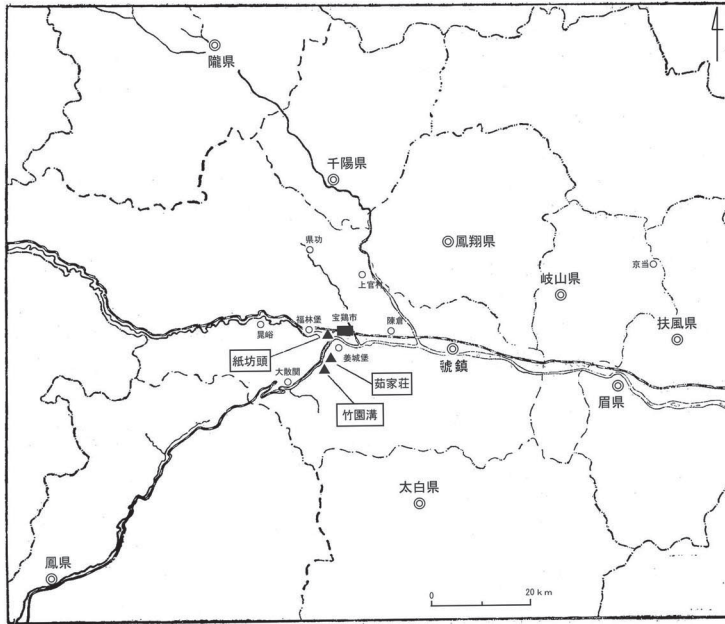
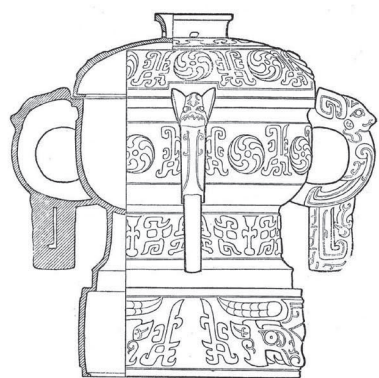


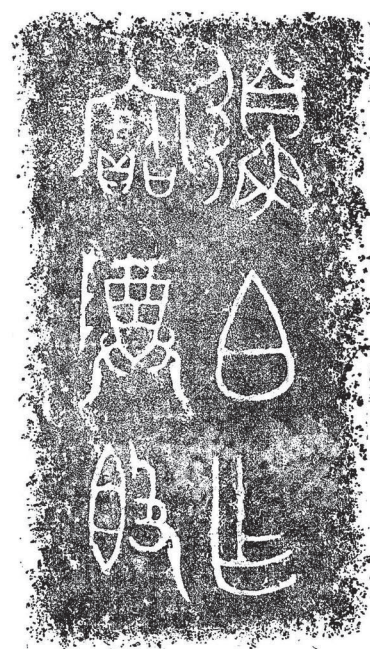
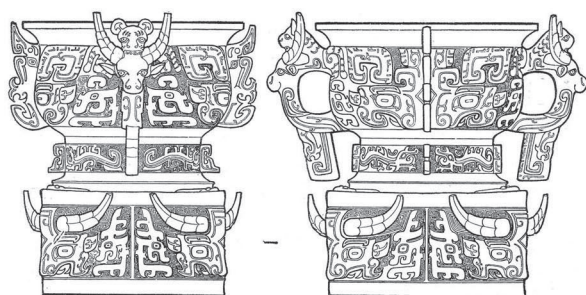
図1 強国墓地の所在



図2 竹園溝墓地・茹家莊墓地



1. 簋 BZFM1:6



2. 簋 BZFM1:7

図3 紙坊頭1号墓出土「強伯」銘を持つ青銅器 (S=1/8)

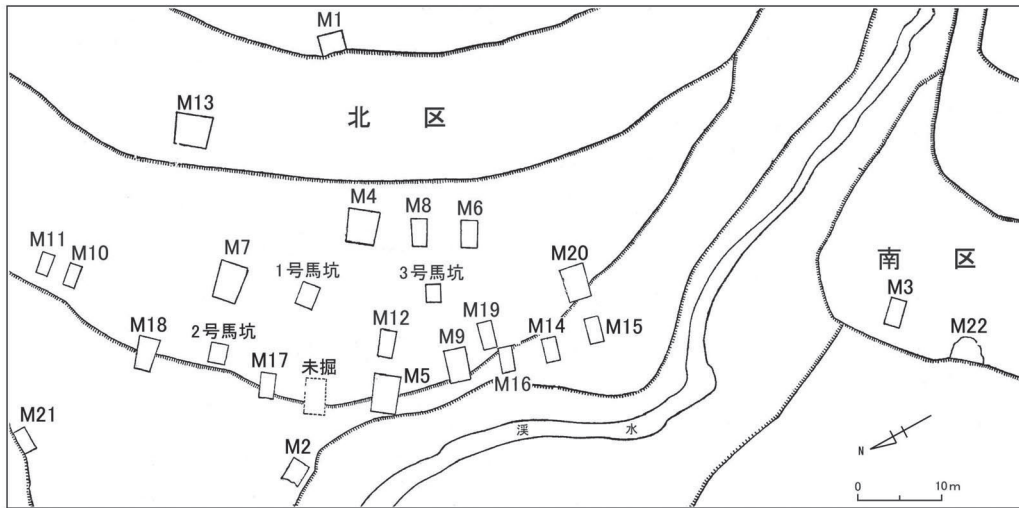


図4 竹園溝墓地大型墓・車馬坑

では主体被葬者を男性、副次的被葬者を女性と判断しており、夫婦合葬墓だとされる。被葬者名として特徴的な青銅器銘文としては、BZM7 から「白各乍寶障彝」（伯各、寶障彝を作る）銘が三点⁸⁾、BZM4 から「彊季乍寶旅彝」（彊季、寶旅彝を作る）銘が二点検出されており、M7 被葬者は伯各、M4 被葬者は彊季だとされる（図6）。なお、BZM1、BZM2、BZM21、BZM22 は後代の削平を受けて墓坑の一部が失われている。竹園溝墓地出土の青銅器について表1にまとめた。

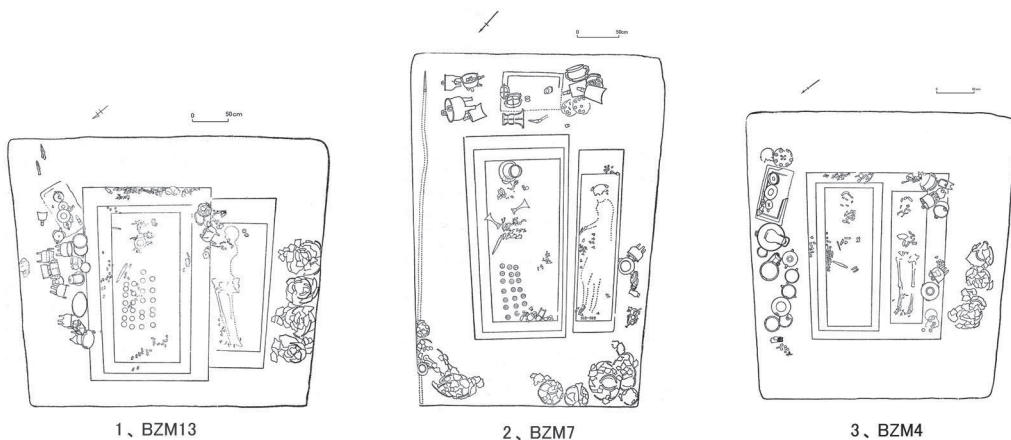


図5 竹園溝墓地の夫婦合葬墓

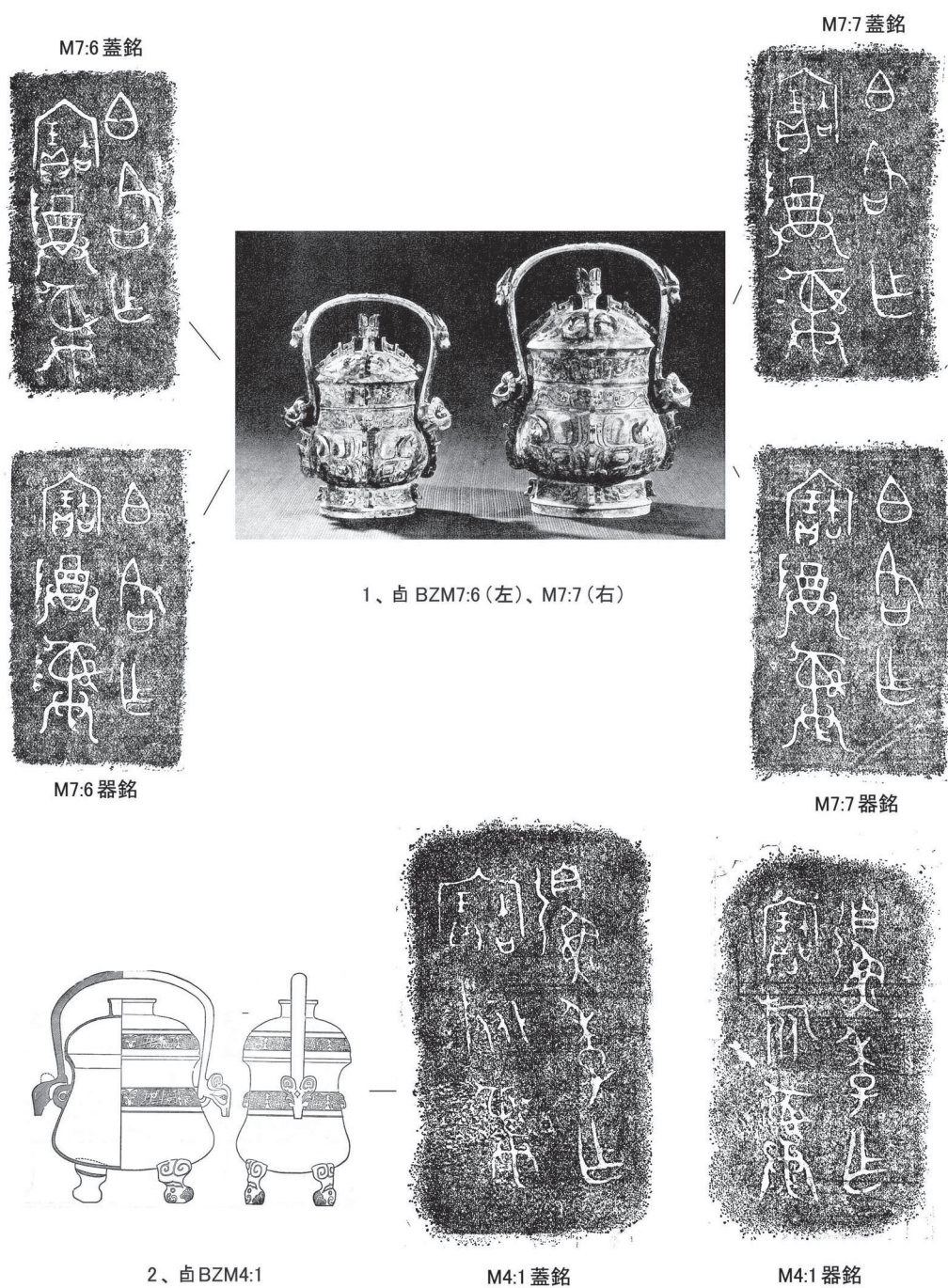


図6 BZM7出土「伯各」銘・BZM4出土「強季」銘青銅器 (2:S = 1/8)

宝鶏強人墓における葬礼の差異とその変化

表 1 竹園溝墓地出土青銅彝器・武器一覧
(※は後代の攪乱を受けている墓)

墓号	合葬墓	青銅彝器	青銅武器	被葬者
BZM1 ※		鼎 5 簋 3 爵 1 盤 1	戈 4 明器戈 9 矛 1 劍 1	
BZM2 ※		なし	なし	
BZM3		鼎 1 簋 1	戈 2 明器戈 5	
BZM4	○	鼎 7 簋 3 卣 1 尊 1 鬲 3 甗 1 觶 3 爵 1 盤 1 壺 1 斗 1	戈 7 明器戈 6 矛 2 劍 1 鐔 1	彌季
BZM5		なし	なし	
BZM6		なし	なし	
BZM7	○	鼎 4 簋 3 卣 2 尊 2 觚 2 觶 2 壺 1 斗 1 編鍾 3	戈 3 明器戈 10 矛 1 鉞 1 劍 1	伯各
BZM8		鼎 1 簋 1 卣 2 尊 1 觶 1 爵 1	戈 3 明器戈 8 劍 1 戟 1	
BZM9		鼎 2 簋 2 (うち鼎 1 簋 2 は錫製)	なし	
BZM10		なし	戈 1 明器戈 2	
BZM11		鼎 1	戈 1 明器戈 3 劍 1	
BZM12		なし	なし	
BZM13	○	鼎 9 簋 4 卣 2 尊 1 甗 1 觚 1 觶 1 爵 1 盤 1 壺 1 盃 1 豆 1 饒 1 斗 1	戈 6 明器戈 14 矛 3 鉞 1 劍 1 鏃 5 異形器 1	
BZM14		鼎 1 簋 1	戈 2 明器戈 6 劍 1	
BZM15		なし	なし	
BZM16		なし	なし	
BZM17		觶 1	なし	
BZM18		鼎 1 簋 1	戈 3 明器戈 6 矛 1 劍 1	
BZM19		鼎 1 簋 1	戈 3 明器戈 6 劍 1	
BZM20		鼎 2 簋 2 盒 1	戈 5 明器戈 6 劍 1 鏃 9	
BZM21 ※		なし	明器戈 10 劍 1 戟 1	
BZM22 ※		なし	戈 1	

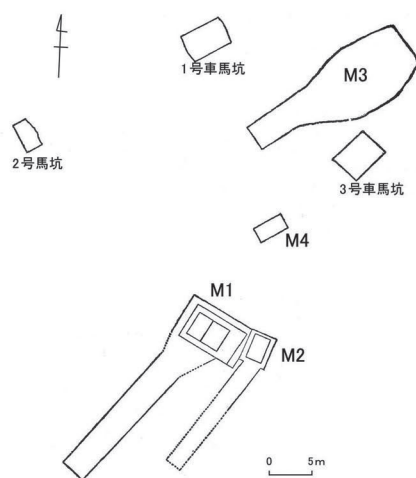


图 7 茹家莊墓地

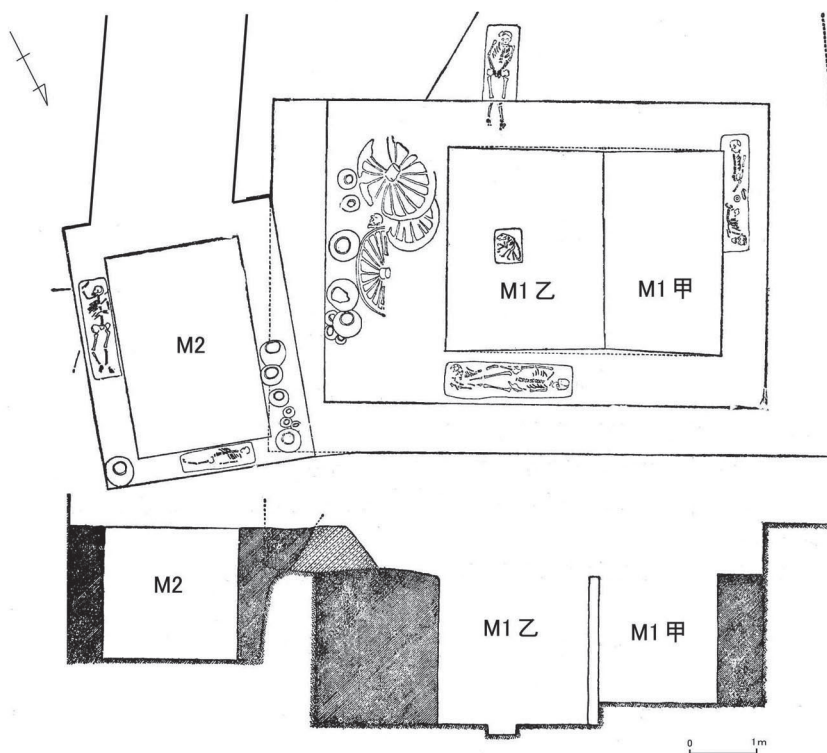


图 8 茹家莊 1・2 号墓

(3) 茹家莊墓地

茹家莊墓地は竹園溝墓地の北東約 3 km に位置する。4 基の墓が検出されているが、3 号墓 (BRM3) は報告者によって「仮大墓」の可能性が指摘されており、遺物はほとんど検出されていない。BRM1 は墓道を持つ甲字形墓で、墓室は木製の隔壁によって区切られそれぞれ甲室・乙室とされる。甲室被葬者が女性、乙室被葬者が男性とされ、BRM1 も夫婦合葬墓と言える。BRM2 は BRM1 を一部壊す形で作られ、造営時期が BRM1 よりもやや遅い (図 7・8)。BRM1 乙室からは多くの銘文を持つ青銅器が出土しており、鼎 BRM1 乙:13 には「強白乍自爲鼎設」(強伯、自ら爲れる鼎設を作る)、甗 BRM1 乙:22 には「強白自爲用甗」(強伯、自ら用ふる甗を爲る)、鬲 BRM1 乙:33 には「強白乍甗」(強伯、甗を作る)、簋 BRM1 乙:6 には「強白乍自爲鼎設」(強伯、自ら爲れる鼎設を作る)、簋 BRM1 乙:8 には「強白乍旅用鼎設」(強伯、旅に用ふる鼎設を作る)、盃⁹⁾ BRM1 乙:18 と盤 BRM1 乙:1 には「強白乍般鑒」(強伯、自ら盤鑒を作る)、盤 BRM1 乙:2 には「強白乍用盤」(強伯、用ふる盤を

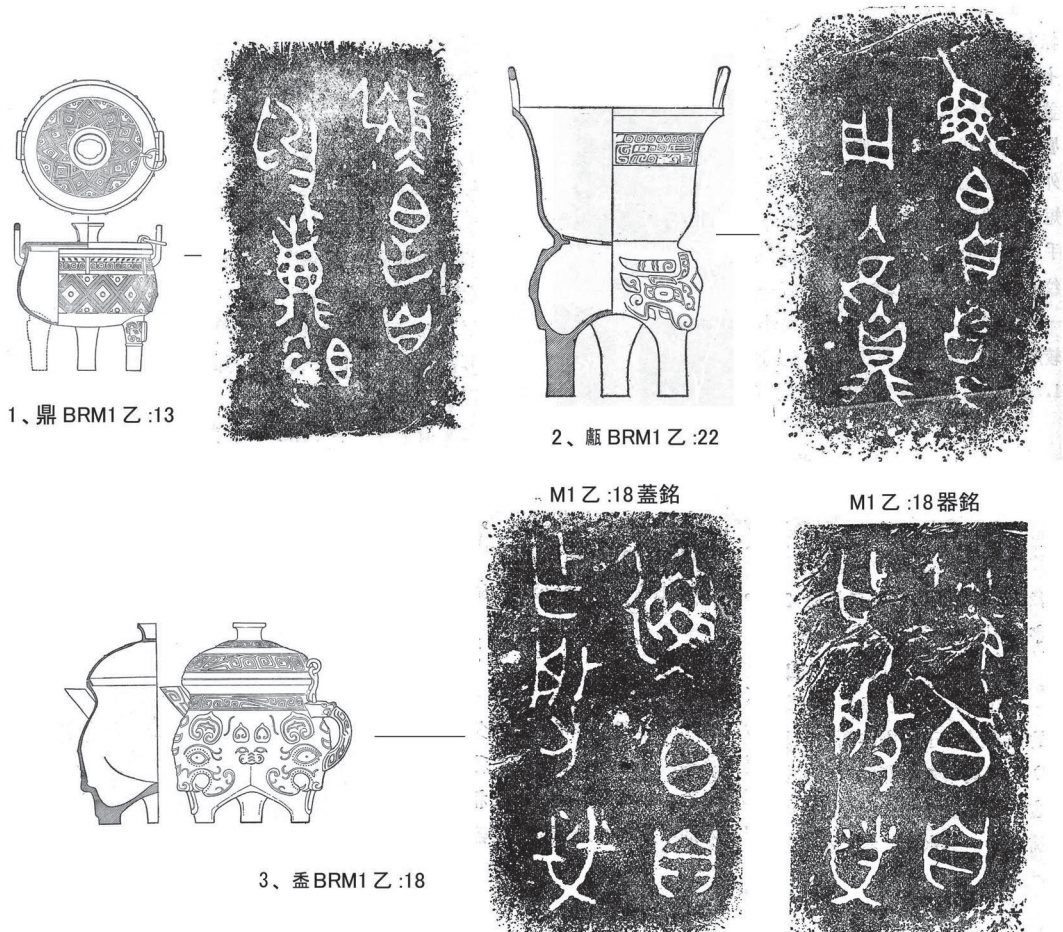


図9 BRM1 乙室出土「強伯」銘青銅器 (S=1/8)

作る)とそれぞれ鑄される(図9)。これらに見える「彊白」「彊白」「彊白」はどれも同一人物で、BRM1 乙室被葬者だと考えられている¹⁰⁾。一方で BRM1 甲室からは検出される青銅器銘文は「兒」一文字を持つもののみである。

BRM2 にも青銅器銘文が確認される。鼎 BRM2 : 5 内壁には「彊白乍井姫用鼎」(彊伯、井姫の用ふる鼎を作る)という銘が確認できる。この「井姫」なる人物は当墓の被葬者とされるが、その名は他にも多くの銘に見える。鼎 BRM2 : 2 と鼎 BRM2 : 3 には「井姫歸亦倂祖考口公宗室孝祀孝祭佳彊白乍井姫用鼎殷」(井姫、歸し〔祭祀名?〕、亦た祖考口公の宗室に倂¹¹⁾し〔祭祀名?〕、孝祀し孝祭せり。惟れ彊伯、井姫の用ふる鼎殷を作る)と同銘が鑄される。鼎 BRM2 : 1 には「彊乍井姫用鼎」(彊、井姫の用ふる鼎を作る)、鼎 BRM2 : 6 には「彊白乍井姫災鼎」(彊伯、井姫の災鼎を作る)、甗 BRM2 : 21 には「彊白乍井姫用𩺰」(彊伯、井姫の用ふる𩺰を作る)、動物尊¹²⁾ BRM2 : 16 は「彊白^あ乍井姫用孟錙」(彊白、井姫の用ふる孟錙を^あ乍)、とそれぞれ鑄される¹³⁾(図10)。この BRM2 被葬

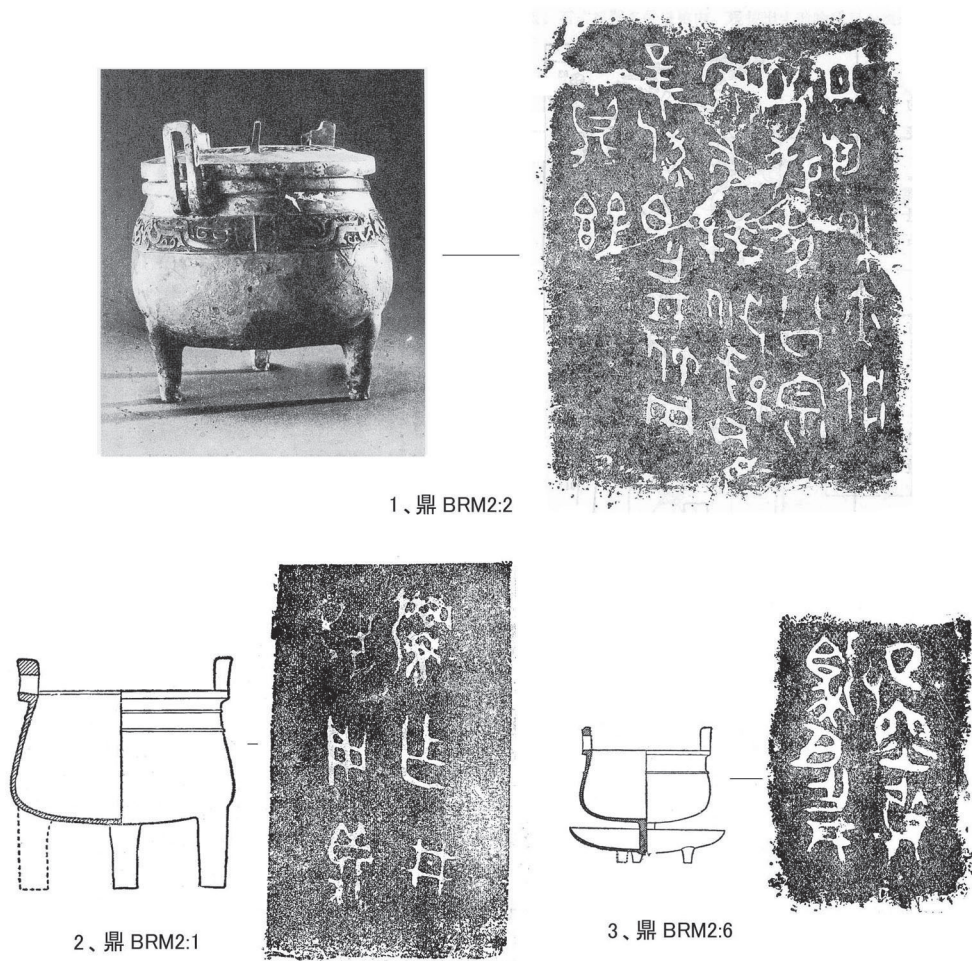


図10 BRM2 出土「井姫」銘青銅器 (2・3 : S=1/8)

表 2 茹家荘墓地出土青銅彝器・武器一覧

墓号	合葬墓	青銅彝器	青銅武器	被葬者
BRM1 甲室	○	鼎 5 簋 4 鎮 1	なし	兒
BRM1 乙室		鼎 8 簋 5 卣 1 尊 5 鬲 2 甗 1 觶 1 爵 2 罍 1 盤 2 壺 2 盃 1 豆 4 斗 1 編鐘 3	戈 8 鉞 2 劍 2 鐙 2	強伯
BRM2		鼎 6 簋 5 尊 1 鬲 3 甗 1 盤 1 盒 2	なし	井姫
BRM4		なし	なし	

者とされる井姫であるが、西周中期以降の青銅器銘文に多く現れる「井伯」「井叔」と同じく、西周王室の重臣であった井氏の出身であることが既に指摘されており（西江 1999）、強人と西周王室との強い結びつきが想定される。

以上、茹家荘墓地出土の青銅器についてまとめたものが表 2 である¹⁴⁾。

『強国』では紙坊頭、竹園溝、茹家荘の各墓について、それぞれ造営年代を与えており、紙坊頭 1 号墓は武王～成王期、茹家荘墓地は昭王～穆王期とする。竹園溝墓地については大きく二期区分し、M1・2・3・4・6・7・8・10・11・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22 を第一期、M5・9・12 を第二期とする。第一期はさらに前半と後半に分け、前半に M1・6・7・8・10・11・13・14・15・16・18・19・20、後半に M2・4・17 を置く。また、西周王年との対応に関しては一期前半を成王～康王期、一期後半を昭王～穆王期、二期を穆王期とする。

ここで出土青銅器から竹園溝墓地の各墓の時期を検討したい（図 11）。筆者は西周時代青銅器の時期区分について、前期・中期・後期の 3 期に分け西周Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期と表記し、さらに各期を前半と後半とに分けてそれぞれ A・B とする立場をとっている（角道 2007）¹⁵⁾。竹園溝墓地出土青銅器のうち最も広く検出される器種である鼎を中心に見ると、BZM1・8・13・14・20 の各墓から出土した青銅鼎は腹部の垂腹化の出現が看取されるもののその程度は比較的緩やかであり、その側視形は同じ西周墓出土の張家坡 M62：1 や天馬—曲村 M7004：2、M6235：3 と近い（中国社会科学院考古研究所 1999；北京大学考古学系商周組・山西省考古研究所 2000）。西周Ⅰ A 末～Ⅰ B の時期が与えうる。一方で BZM7・11・18・19 出土の青銅鼎は垂腹化の程度から西周Ⅰ B に相当する。BZM3：2 は垂腹化がさらに進行した西周Ⅱ A の段階で、張家坡 M217：1 や天馬—曲村 M7052：1 と対応する。BZM4 出土青銅鼎は西周Ⅰ 的な特徴を残すが、同出する卣 BZM4：1 の形状から判断して、当墓も西周Ⅱ A に属するものと考えたい。BZM9 出土青銅鼎は底部が完全に平坦化し、天馬—曲村 M7113：5 に似る。西周Ⅱ B に相当する。各墓の相対的な前後関係は基本的に『強国』に示された時期区分と一致し、また鼎以外の青銅彝器の年代観から見ても、上述の時期設定には問題が無い。ここで、『強国』の竹園溝一期前半は林編年の西周Ⅰ A～Ⅰ B に、一期後半は西周Ⅱ A に、二期は西周Ⅱ B にそれぞれ

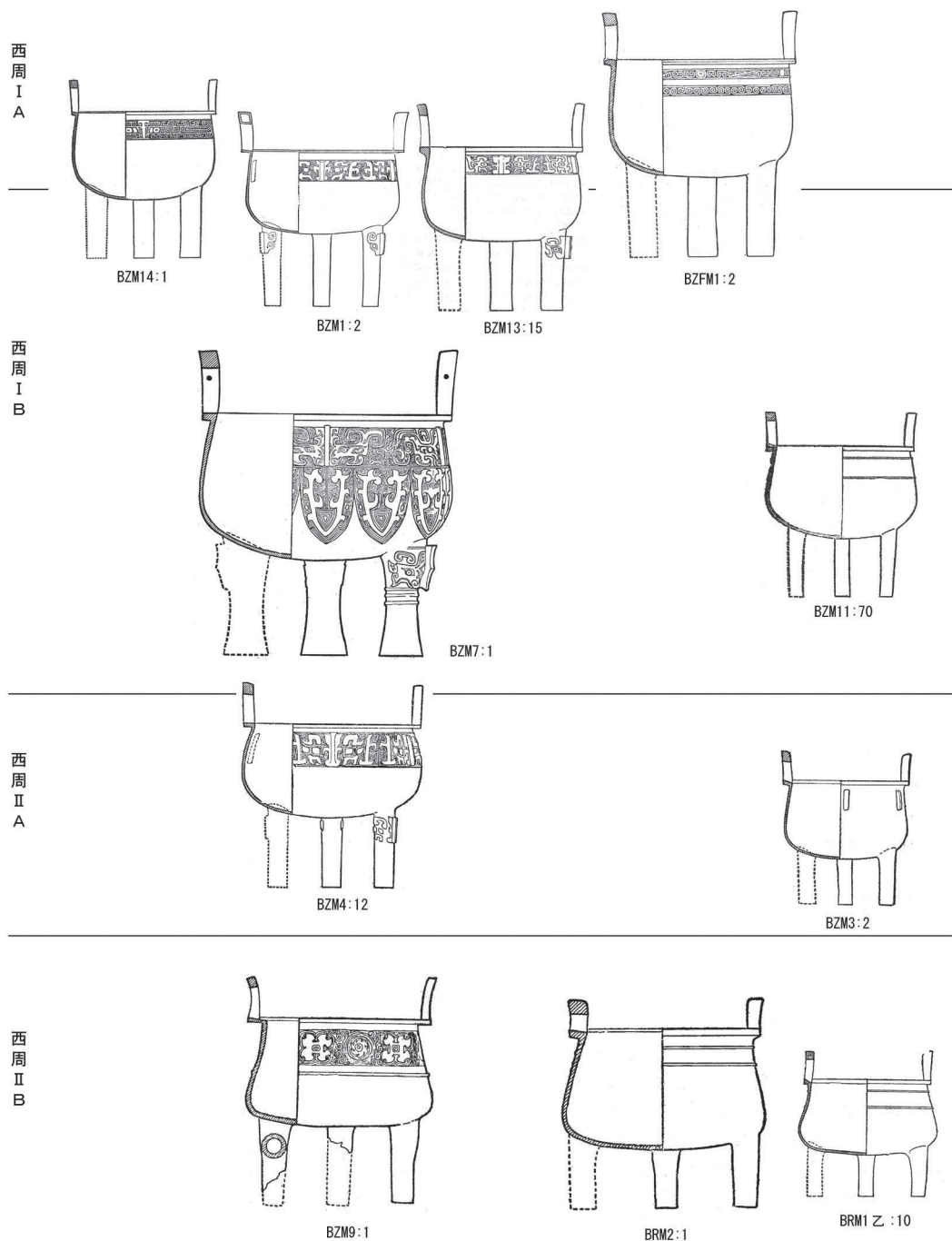


图 11 虢国墓地出土青铜鼎编年 (S=1/8)

宝鶏強人墓における葬礼の差異とその変化

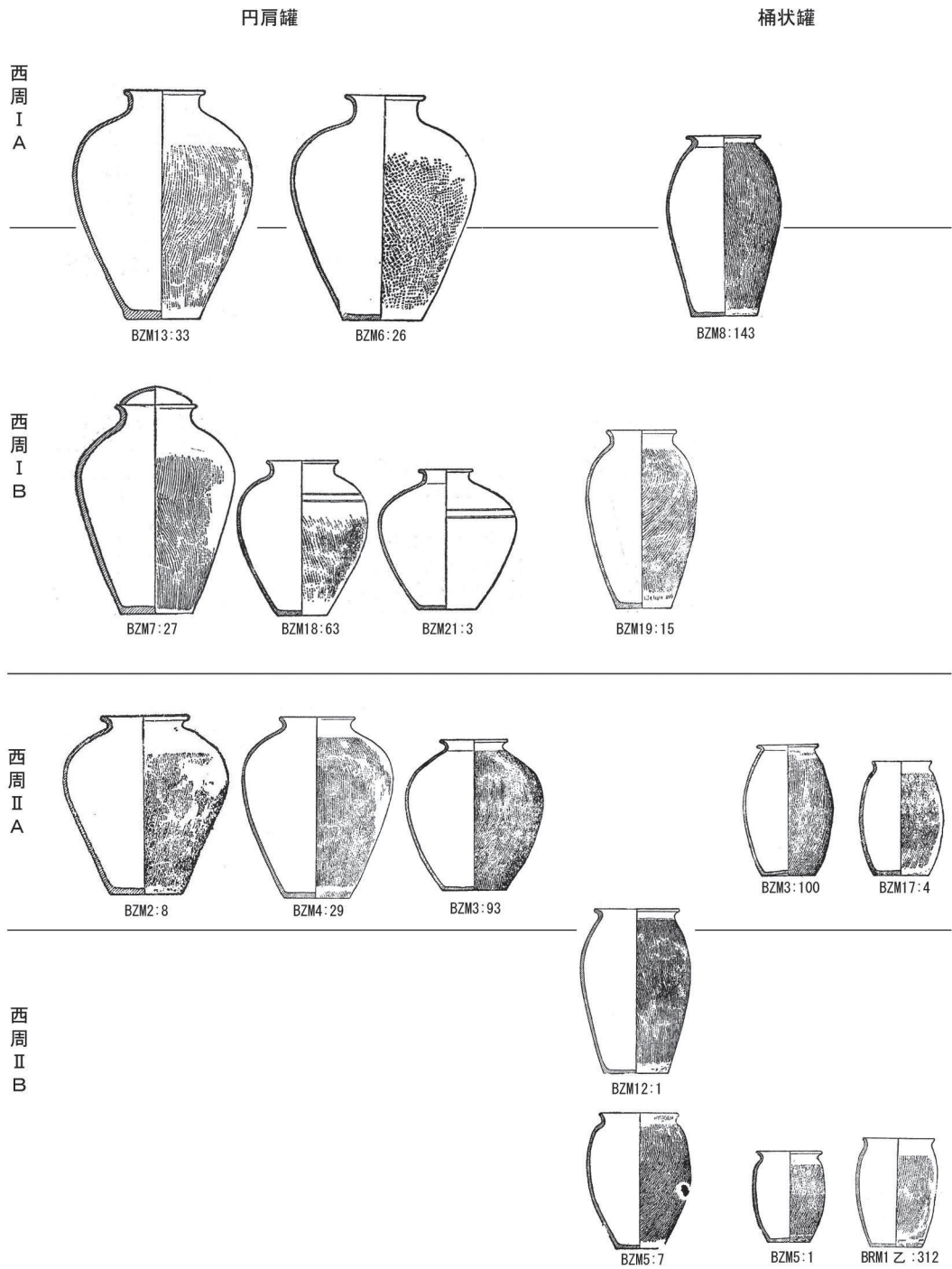


図 12 強国墓地出土土器罐編年 (S=1/15)

対応するものとして考えたい¹⁶⁾。

図 11 では以上の竹園溝墓地の青銅鼎編年に加えて、紙坊頭・茹家荘墓地出土の青銅鼎も合わせて示した。紙坊頭 1 号墓・竹園溝墓地・茹家荘墓地を総合して考えると、紙坊頭出土の青銅器の型式は『強国』のいう竹園溝一期前半とほぼ一致し、西周 I A 末に相当する。一方で茹家荘墓地出土の青銅器は竹園溝 M9 出土のものに似て、垂腹化が進行した西周 II B の様相を呈する。茹家荘諸墓は竹園溝二期に並行するものと考えられる。

最後に、竹園溝墓地出土の土器罐について検討する（図 12）。強国墓地出土の土器のうち常に定型化したセットをなすのが平底罐と尖底罐であるが、特に平底罐についてはその頸部の変化に特徴が見られる。円肩罐と桶状罐¹⁷⁾のうち、西周 I の段階では円肩罐の頸部は直に立ち上がった後に外反するが、桶状罐は頸部がすばまった後に立ち上がることなく外反しながら口が開く。これが西周 II の段階になると、桶状罐のグループは頸部のすばまりが弱まり、口が大きく開く型式へと変化する。一方で西周 II の円肩罐では頸部の立ち上がりが無くなりそのまま外反するようになる。この土器罐の検討から、青銅鼎を出土しない墓のうち BZM6 は西周 I A～I B、BZM21 は西周 I B、BZM2・17 は西周 II A、BZM5・BZM12 は西周 II B に相当すると考えられる。BZM12 出土罐は BZM5 出土罐に比べやや型式が遡る可能性がある。BZM10・15・16・22 は出土遺物から年代が与えにくい。『強国』では BZM10・15・16 に竹園溝一期前半の年代が与えられているため、ここではそれに従い西周 I と見なす。また、BZM22 は BZM3 とともに竹園溝墓地の中心から離れて南側の丘陵上に造営されていることから、M3 と同時期、すなわち西周 II A 時期の墓と捉えたい。

強国墓地を構成する三箇所（BZM1・BZM2・BZM3）の墓の年代は、以上のように西周 I A 末～I B、II A、II B の 3 時期にほぼ収まることになる。ここで強国墓地全体の時期として、1 期、2 期、3 期を設定し、I A 末～I B、II A、II B をそれぞれ対応させ、各墓に時期を与えた結果をまとめたものが表 3 である。強国 1 期に BZFM1 と BZM1・6・7・8・10・11・13・14・15・16・18・19・20・21 が属し、最も盛んに墓の造営が行われた時期だと言える。BZM7・11・18・19 は青銅器の型式から同じ強国 1 期でもやや時期が下がるものと考えられ、また BZM21 も土器型式からこの時期を与えた。強国 2 期には BZM2・3・4・17・22 が属し、強国 3 期には BZM5・9・12、BRM1・2・4 が属する。茹家荘墓地はすべて強国 3 期に相当する。この 3 期区分を基礎として、次に各墓出土の副葬品の関係について検討したい。

表 3 強国の 3 期区分

時期	墓号					対応する西周王年
強国 1 期 (西周 I A 末 西周 I B)	BZFM1	BZM1	BZM6	BZM8	BZM10	武王 康王
	BZM13	BZM14	BZM20		BZM15	
	BZM7	BZM11	BZM18	BZM19	BZM16	
	BZM21					
強国 2 期 (西周 II A)	BZM2	BZM3	BZM4	BZM17	BZM22	昭王 懿王
強国 3 期 (西周 II B)	BZM5	BZM9	BZM12	BRM1	BRM2	

2. 強国墓地の男女埋葬とその変化

(1) 強国墓地副葬品格差への検討

紙坊頭、竹園溝、茹家荘の三箇所にかけて分布する強国墓地は、西周 I 期から II 期にかけて存続した墓地であり、それはすなわち西周王朝が成立し周辺地域の平定を経て安定期から拡張期に差し掛かるとされる時期に相当する。この時代に強国墓地に埋葬された人々はどのような集団であったのか。被葬者の階級という視点から、強国墓地を分析する。

西周時代の副葬青銅彝器は多岐にわたるが、その中で最も重要な組合せを作るのが、鼎と簋である。『春秋公羊伝』桓公二年注には「天子九鼎、諸侯七、卿大夫五、元士三也」とあり、西周期の祭器として鼎が重要な位置を占めていたことを伝えている。実際に西周墓からは鼎と簋が複数個出土する例が多くあり、鼎と簋のセットが身分表象として重要であったと考えられる。強国墓地では鼎・簋の他にも青銅彝器が検出されているが、やはり出土青銅彝器の中心は鼎と簋と言ってよい。ここでは、強国墓地に属する各墓を、鼎と簋の組を中心に出土遺物の規模によって分類する。

強国墓地の副葬品規模は以下の三類に分けられる。I 類が最も青銅器が豊富に出土する墓で、III 類は最も乏しい墓である。墓が 1 基のみしか検出されず出土青銅器組成も不明な紙坊頭墓は、今回の分析では対象外とし、竹園溝、茹家荘の計 25 基の墓について検討を行った。なお、BZM13・7・4、及び BRM1 は男女同穴合葬墓であり、『強国』の記述に従って両者の副葬遺物を区別して扱った¹⁸⁾。

I 類 : 鼎・簋を 2 組以上持ち、他の青銅彝器も多く有する墓

II 類 : 青銅彝器を有するが、鼎・簋を 1 組以下しか持たない墓、および鼎・簋を 2 組以上持つものの他の青銅彝器が極めて乏しい墓

III 類 : 青銅彝器を持たない墓

強国墓地の各墓について、出土遺物から I 類～III 類を与えたものが表 4 である。I 類には BZM13

甲、BZM7 甲、BZM4 甲、BZM1、BRM1 甲・乙、BRM2 の計 6 基 7 人が相当する。「獺白」「獺季」といった、獺の指導的立場にあったと考えられる人物の墓はみなⅠ類に属する。Ⅱ類にはBZM13 乙、BZM7 乙、BZM4 乙、BZM8、BZM20、BZM9、BZM19、BZM14、BZM18、BZM3、BZM11、BZM17 の計 12 基 12 人が該当する。茹家荘墓地には見られない。Ⅲ類はBZM21、BZM6、BZM10、BZM15、BZM16、BZM2、BZM22、BZM5、BZM12、BRM4 の 10 基 10 人である。

このⅠ～Ⅲ類の別を、獺国墓地の時期ごとに図 13 に示した。獺国 1 期・2 期に竹園溝墓地に造営される墓のうち、1 期の段階ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ類ともに多数分布するのに対して、2 期では造営数が減少し、わずかに夫婦合葬のⅠ・Ⅱ類墓が 1 基とⅡ類墓、Ⅲ類墓が 2 基ずつ存在するのみである。この傾向は 3 期に入っても継続し、竹園溝墓地ではⅠ類墓が廃絶する。Ⅱ類墓が 1 基、Ⅲ類墓が 2 基確認され、代わって同じ獺国 3 期のⅠ類墓は茹家荘に出現するようになる。茹家荘ではⅠ類墓が 3 基とⅢ類墓が 1 基造営されている。

以上のように、竹園溝墓地が衰退し茹家荘墓地へと移行する流れにおいて、最も副葬品を豊富に有するⅠ類墓、Ⅰ類墓には及ばないものの青銅彝器を有するⅡ類墓、全く青銅彝器を待たないⅢ類墓の 3 種類の墓が存在することが分かった。この墓における区分が何に起因するものなのかを検討するために、特に性別の問題を中心にⅠ～Ⅲ類の被葬者たちの関係性について考察する。

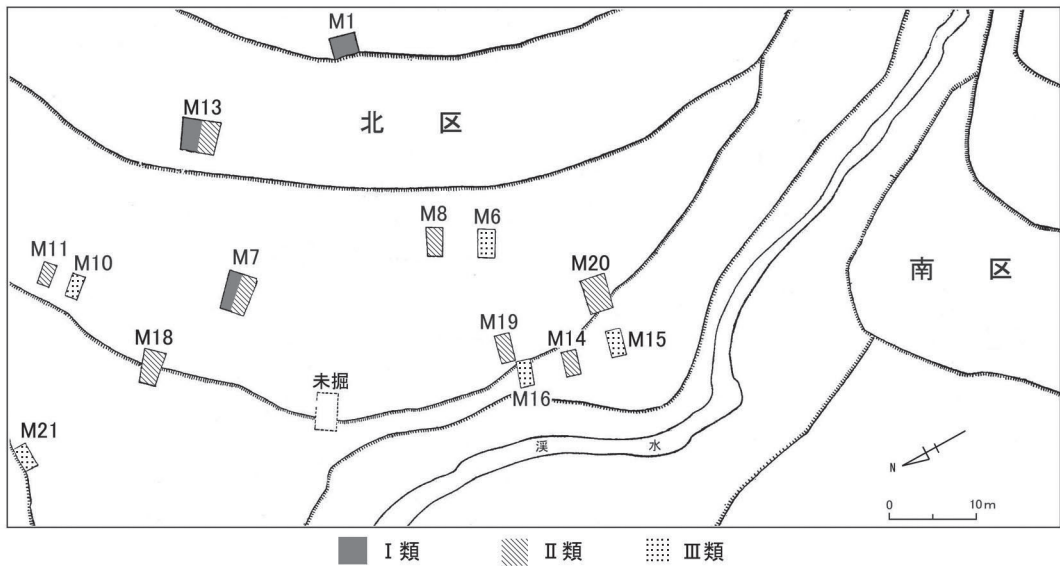
(2) 獺国墓地における男女埋葬状況

獺国墓地では 4 基の夫婦同穴合葬墓が確認されており、BZM13・7・4 と BRM1 がそれに当たる。それぞれ主体的被葬者は男性で、それに伴うかたちで女性が埋葬されているという状況は前述の通りである。ここで夫婦同穴合葬墓における男女間の副葬品の差異について着目すると、青銅武器・青銅工具の有無が指標となりうる点が指摘されている（盧・胡 1988；江 2006）¹⁹⁾。

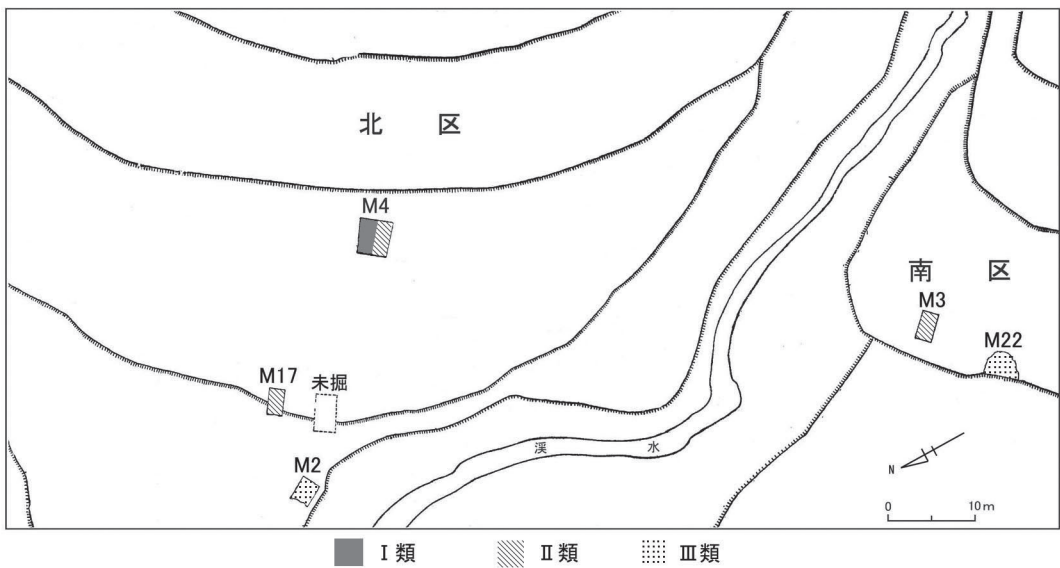
獺国墓地における夫婦合葬墓出土の青銅武器・青銅工具について表 5 に示した。主体的被葬者を男性、妾とされる被葬者を女性として見ると、男女間で明確な差異が存在しており、獺国墓地においては青銅武器と工具は圧倒的に男性墓から出土し女性墓にはほとんど伴わないということが読み取れる。唯一例外といえるのが BZM7 妾の銅刀であるが、これは二層台上からの検出であり、確実に BZM7 妾に伴う遺物だとは言えない。従って獺国墓地においては、男性墓では青銅武器・工具が検出され、女性墓ではこれらの遺物が検出されないという傾向を与えることが可能である。

獺国墓地の青銅武器・青銅工具出土墓について、夫婦合葬墓を除いた単独墓についても検討したものが表 6 である。こちらでも、青銅武器・工具を持つ墓のグループ（BZM1～BZM22）と、青銅武器・工具を持たない墓のグループ（BZM6～BRM4）とにきれいに分かれた。このうち、1 期に属し青銅武器・工具を持つ墓は BZM1・20・14・8・18・19・11・21 の計 8 基、一方で 1 期に属し武器・工具を持たない墓は、BZM6・10・15・16 の計 4 基となる。BZM10 は報告でⅢ式銅戈 1 点と明器戈を 2 点出土するが、これらの戈は非常に小さく、実用武器としての役割は果たさない。また後述するように、当器は獺国と四川地域との関連性を表す特徴的な遺物であり族集団の出自を象徴する遺物としての性

宝鶏強人墓における葬礼の差異とその変化

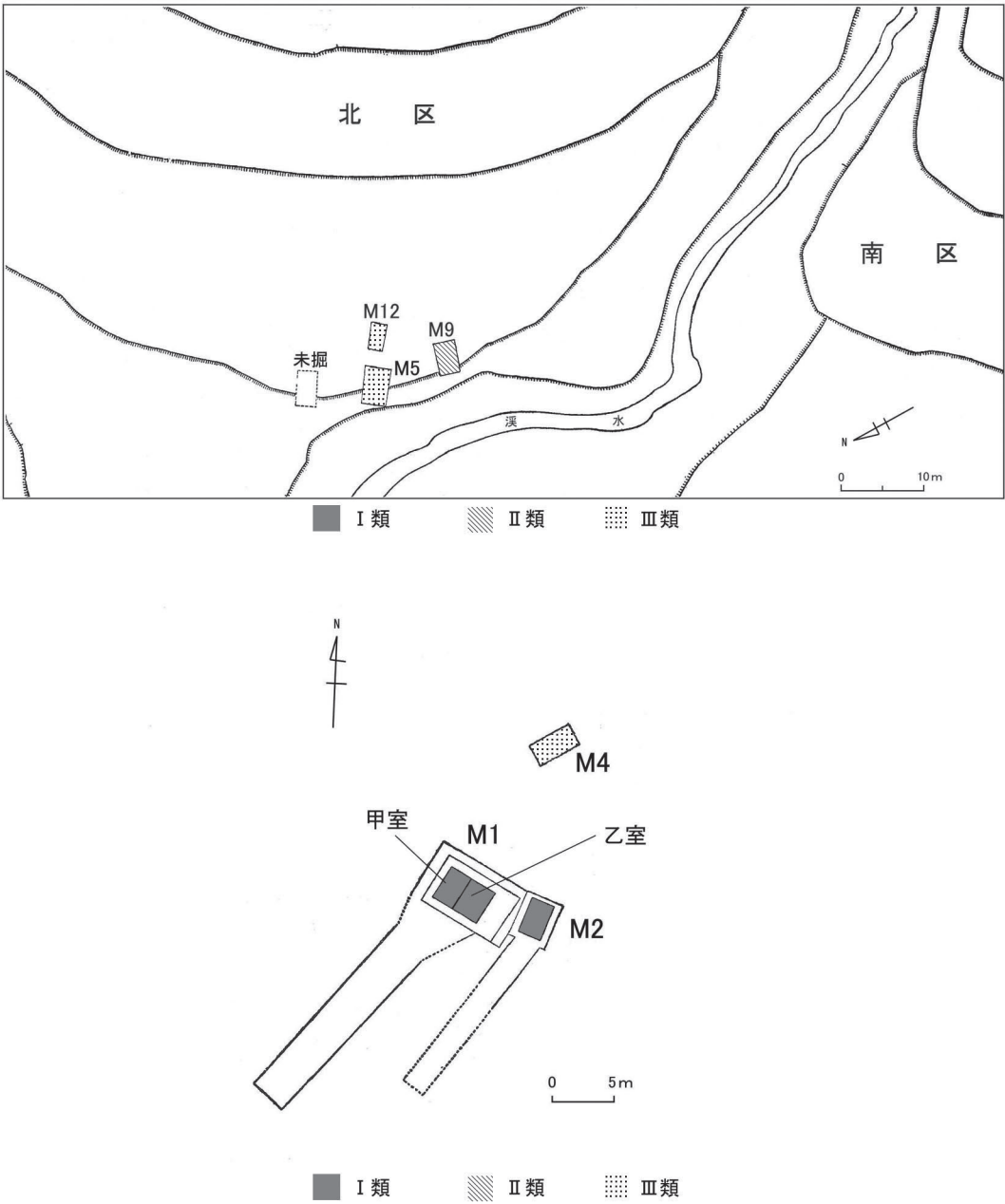


強国1期



強国2期

図13 強国墓地時期別分布図①



強国3期

图 13 強国墓地時期別分布图② (上：竹園溝墓地 下：茹家莊墓地)

宝鶏強人墓における葬礼の差異とその変化

表 4 各墓出土青銅鼎・簋と類

墓号	時期	類	出土青銅彝器
BZM13 甲組（墓主）	1 期	I	鼎 7 簋 3 + (卣 2 尊 1 甗 1 觚 1 解 1 爵 1 盤 1 壺 1 盃 1 豆 1 斗 1 鏡 1)
乙組（妾）		II	鼎 2 簋 1
BZM7 甲組（墓主）	1 期	I	鼎 3 簋 2 + (卣 2 尊 2 觚 2 解 1 斗 1 編鍾 3)
乙組（妾）		II	鼎 1 簋 1 + (罍 1 解 1)
BZM4 甲組（墓主）	2 期	I	鼎 4 簋 2 + (卣 1 尊 1 鬲 1 甗 1 解 2 爵 1 盤 1 壺 1 斗 1)
乙組（妾）		II	鼎 3 簋 1 + (鬲 2 解 1)
BZM1	1 期	I	鼎 5 簋 3 + (爵 1 盤 1)
BRM1 乙室（墓主）	3 期	I	鼎 8 簋 5 + (卣 1 尊 5 鬲 2 甗 1 解 1 爵 2 罍 1 盤 2 壺 2 盃 1 豆 4 斗 1 編鍾 3)
甲室（妾）		I	鼎 5 簋 4 + (鎛 1)
BRM2	3 期	I	鼎 6 簋 5 + (尊 1 鬲 3 甗 1 盤 1 盒 2)
BZM8	1 期	II	鼎 1 簋 1 + (卣 2 尊 1 解 1 爵 1)
BZM20	1 期	II	鼎 2 簋 2 + (盒 1)
BZM9	3 期	II	鼎 2 簋 2（うち鼎 1 簋 2 は錫製）
BZM19	1 期	II	鼎 1 簋 1
BZM14	1 期	II	鼎 1 簋 1
BZM18	1 期	II	鼎 1 簋 1
BZM3	2 期	II	鼎 1 簋 1
BZM11	1 期	II	鼎 1

BZM17	2 期	Ⅱ	殯 1
BZM21	1 期	Ⅲ	なし
BZM6	1 期	Ⅲ	なし
BZM10	1 期	Ⅲ	なし
BZM15	1 期	Ⅲ	なし
BZM16	1 期	Ⅲ	なし
BZM2	2 期	Ⅲ	なし
BZM22	2 期	Ⅲ	なし
BZM5	3 期	Ⅲ	なし
BZM12	3 期	Ⅲ	なし
BRM4	3 期	Ⅲ	なし

格が強く、特殊な遺物である。従って、ここでは BZM10 のⅢ式戈・明器戈を例外と考へ、当墓も青銅武器・工具を持たないグループとして分類している。

この 8 基と 4 基の墓は、墓の配置という点で非常に意味のある結果を示す。図 13 に示したように、今回、青銅武器・工具が出土した 8 基の墓のうち、BZM20・14・8・18・19・11 の 6 基はどれもⅡ類に分類されるが、それぞれの墓の周辺にはⅢ類の墓が存在し、そのどれもが青銅武器・工具を持たない墓なのである。すなわち、青銅武器・工具を持つ BZM11 は、青銅武器・工具を持たない BZM10 の北側に隣接する。同様に M8 は M6 の北側に隣接し、BZM19 は BZM16 の北側に隣接している。BZM15 は BZM20 と BZM14 の両方に近く位置するが、BZM14 と並んでみると見た場合、やはり青銅武器・工具を持つ BZM14 が、武器・工具を持たない BZM15 の北隣に位置しているのである。ここに表れた青銅武器・工具を持つ墓が、持たない墓の北隣に位置する、という様相は、上で見た夫婦合葬墓における男性墓・女性墓の状況と全く同じ様相を呈していると言える。青銅武器・工具を持つ墓を男性墓、持たない墓を女性墓として竹園溝墓地 1 期を見ると、BZM13 組 (BZM13 墓主・妾)、BZM7 組 (BZM7 墓主・妾) という 2 組の夫婦合葬墓と、BZM11 組 (BZM11・BZM10)、BZM8 組 (BZM8・BZM6)、BZM19 組 (BZM19・BZM16)、BZM14 組 (BZM14・BZM15) という 4 組の夫婦異穴合葬墓からなる大規模墓地として見るのできるのである。

1 期のⅡ類墓は、すべて青銅武器・工具を出土し男性墓である。一方で、Ⅲ類墓は BZM21 を除いて全て女性墓である。BZM21 が後代の削平を受けていることを考えれば²⁰⁾、BZM21 が造営された段階ではⅡ類を満たす量の副葬遺物を有していた可能性も大いにありえる。この場合、1 期の単独墓のうち男性墓は、対応する女性墓を持たない BZM1 (Ⅰ類) を除いてすべてⅡ類となり、女性墓はⅢ類と対応する。また合葬墓では、男性は全てⅠ類であり対応する女性墓はⅡ類である。つまり、1 期合葬墓においてはⅠ類墓とⅡ類墓の別が、1 期単独墓においてはⅡ類墓とⅢ類墓の別が、男女

差に起因するものである。従って、竹園溝墓地でⅠ類に相当するBZM13・7・4・1などは副葬品が豊富で青銅器銘にも「強白」「伯各」などと鑄しており、これらⅠ類墓男性被葬者を首長階級の身分と考えるならば、強国Ⅰ期では首長とそれより一段階級の下がる貴族階級の男性が埋葬され、そのそれぞれが自らよりも副葬品規模の一段低い配偶者墓を伴っている。どちらの階級に属する女性であっても、青銅葬器から見た副葬品規模は配偶者たる男性墓より一段劣っている。そして首長階級に属する女性墓と貴族階級に属する男性墓の副葬品の規模はほぼ一致していると考えてよい。

Ⅰ期に属する14基の墓のうち、単独で存在するBZM1、BZM18、BZM20、BZM21の4基を除いた10基の墓は、どれも頭位を東として、北側（向かって左側）に男性、南側（向かって右側）に女性を埋葬する夫婦異穴合葬墓であった。この北側男性・南側女性という様式は首長階級の合葬墓においても当てはまる。しかし、強国Ⅱ期ではこの傾向が読み取りにくい。強国Ⅱ期の竹園溝墓地ではBZM4が首長階級に属する夫婦合葬墓で、男性が北側、女性が南側に埋葬される。当墓は強国Ⅰ期の夫婦合葬墓の男女間差異をそのまま踏襲しており、男女の南北埋葬関係もⅠ期と同じ傾向を示している。変化が見られるのは貴族階級を構成するⅡ類・Ⅲ類墓である。Ⅱ類墓とⅢ類墓が組を為す点ではⅠ期と同様で、BZM3（Ⅱ類）とBZM22（Ⅲ類）、BZM17（Ⅱ類）とBZM2（Ⅲ類）が対応し²¹⁾、Ⅱ類墓がⅢ類墓の北側に位置する点は同様だが、BZM22はⅢ類墓であるにもかかわらず武器・工具を出土しており、逆にBZM17はⅡ類墓だが武器・工具が検出されない（表6）。BZM17組を例にとると、女性墓においても武器の副葬が行われるようになったとも考えられるが、BZM2が後世の削平を受けていることから当墓もまた青銅葬器を有したⅡ類男性墓であった可能性はある。この場合、Ⅱ類墓同士が並ぶこととなるが、BZM17はⅡ類に分類されるもののその出土青銅葬器は小型の鐔1点のみであり、同じⅡ類墓であるBZM3が一鼎一簋を出土することと比べても規模の低さが顕著である。やはり武器が検出されないBZM17はⅡ類男性墓BZM2に対応する女性墓であり、副葬品が

表5 強国墓地夫婦合葬墓出土の青銅武器・工具

	墓号	時期	類	青銅武器										青銅工具					
				鉞	戈	明器戈	戟	矛	鏃	劍	鏃	盾飾	異形器	斧	鏃	鏃	鏃	銅刀	銅彈丸
男性墓	BZM13 墓主	1期	Ⅰ	1	6	14		3		1	5	4	1	1	1	2	2		
	BZM7 墓主	1期	Ⅰ	1	3	10		1		1		1		1		1	1		4
	BZM4 墓主	2期	Ⅰ		7	6		2	1	1		3		1	1	2	1		
	BRM1 墓主	3期	Ⅰ	2	8				2	2		2		2		4	1	1	
女性墓	BZM13 妾	1期	Ⅱ																
	BZM7 妾	1期	Ⅱ															1	
	BZM4 妾	2期	Ⅱ																
	BRM1 妾	3期	Ⅰ																
	BRM2	3期	Ⅰ																

表 6 強国墓地各墓出土の青銅武器・工具（※は後代の攪乱を受けているもの）

	墓号	時期	類	青銅武器										青銅工具					
				鉞	戈	明器戈	戟	矛	鏃	劍	鏃	盾飾	異形器	斧	鏹	鏃	鏃	銅刀	銅彈丸
男性墓	BZM1 ※	1 期	I		4	9		1		1		1		1		1			
	BZM20	1 期	II		5	6				1	9	3				1	1	1	
	BZM14	1 期	II		2	6				1		1							
	BZM8	1 期	II		3	8	1			1		1				1			
	BZM18	1 期	II		3	6		1		1		4		1		1	1	1	
	BZM19	1 期	II		3	6				1				1		1	1	1	
	BZM11	1 期	II		1	3				1		1						1	
	BZM21 ※	1 期	III			10	1			1		2		1		1	1	1	
	BZM3	2 期	II		2	5										1			
	BZM22 ※	2 期	III		1											1	1	1	
	BZM2 ※	2 期	III																
女性墓	BZM6	1 期	III																
	BZM10	1 期	III		1	2													
	BZM15	1 期	III																
	BZM16	1 期	III																
	BZM17	2 期	II																
	BZM9	3 期	II																
	BZM5	3 期	III																
	BZM12	3 期	III																
	BRM4	3 期	III																

1 期に比べてやや豊かになったものと考えたい。当組では、1 期に普遍的であった男性北側・女性南側という対応関係が崩れている。また、BZM22 も後代の削平を受けており II 類墓であった可能性がある。その場合、BZM3 と BZM22 は同じ II 類男性墓であり対応する夫婦墓ではないということになる。削平や未掘墓の関係で判断が難しいが、いずれの場合でも 1 期にみえた規則性が失われていることは明らかであり、この貴族階級の墓から見られる傾向は、1 期の慣例を継続する BZM4 とは明らかな違いを表出している。

強国 3 期では大きく変化する。竹園溝墓地からは I 類墓が消滅し、代わりに茹家荘墓地に I 類墓が出現するが、BRM1 は墓主たる強伯を南東側（乙室）、その夫人を北西側（甲室）に埋葬する。また、BRM2 も BRM1 の墓主に伴う女性墓だと考えられており、男性一人に女性二人という様相を呈する。どの墓からも大量の青銅葬器が検出されており、貴族階級の墓との隔絶化が進行している。同時期の竹園溝墓地では II 類墓、III 類墓が造営されるが、これも強国 1 期の傾向とは異なり、II 類墓であ

る BZM9 からは武器は出土せず、Ⅲ類墓 BZM5・12 とともに女性墓であると考えられる。BZM9 は 4 点の彝器を持つ墓であるが、そのうち 3 点が錫製という点で特徴的であり、見かけ上は 2 期に見られた貴族階級女性墓の副葬品規模の豊富化を進行させた形に見える。

以上、強国墓地の夫婦合葬という特徴とその変化の過程を時期ごとに追った。1 期墓の特徴は明確で、首長階級と貴族階級との間には男女共に一段階の差異が存在し、男女間にも同様の差異が存在する。また男女の合葬に規則性が見られ、男性が北側、女性が南側に埋葬される。この規則性は 2 期貴族墓において変化が起き、3 期には首長墓も含め完全に崩れている。副葬品規模の面について言えば、2 期 3 期を通じて貴族階級女性墓では副葬品を多く埋葬するような変化が見られ、一方で 3 期首長階級墓では男女共に多くの副葬青銅器を有するようになる。この墓地における変化が、王朝との関係の中でどのように論じられるのか、次節で検討する。

3. 強国墓地における系統の変化

強国墓地と他地域との関連性については既に多くの研究者が指摘するところであり、強と矢²²⁾・井²³⁾といった他氏族集団との関係が議論されており、また BZM1 出土双耳罐の形状から西方の寺窪文化との関係性も指摘されている²⁴⁾。このような周辺地域との関連で最も注目されるのが四川地域との遺物の類似性である。西江清高氏はその研究の中で、強国墓地出土の土器を中心にその組成の特異性を指摘し、強を担った強集団とは秦嶺西南部から四川川西盆地にかけての一带に出自する集団であり、殷末周初時期に十二橋文化の要素を伴って宝鶏地区へ北上したという動向について明らかにしている（西江 1999）。また、氏は強国墓地出土青銅器についても王朝系・在地系の別を論じ、土着的青銅器の器種の製作が衰退する一方で王朝系青銅器の在地製作が増加したことについて言及している。強集団と四川地域との関連性の指摘に留まらず、強集団の移動と「強国」成立後の王朝系青銅器の受容状況について考察を与えており、参照すべき研究である。また、西周王朝下における一諸侯としての強集団と王朝との関係を追った武者章氏の研究があり、強と周辺諸国との通婚関係などに言及する。当時の強と王朝系青銅器の関係を考える上で重要な研究である（武者 1999）。

強集団内部の変化を考える上で最も重要になるのは、やはり王朝との関係であると考えている。西周王畿に近い関中平原西部に位置しながら独自の文化様相を呈する強集団は、ともすればその特殊性・独自性ばかりが強調されてきた。もちろん強集団が周族とは別の文化内容を持ち、西周前期から中期にわたって独自の文化を保ったことは疑いないが、より重要なのは、そのような他氏族出自としての強集団が、西周時代に入り王朝の中心地に隣接しながら、どのように王朝と交渉し、その文化を受容していったのかを明らかにすることだと考える。

ここでは、王朝系・在地系という概念を利用し、西周時代有力集団としての強と王朝との交渉を検討したい。

強国墓地出土青銅器からは、おおよそ以下の三系統が抽出できる。

表 7-1 強国墓地系統別出土遺物（王朝系）

墓 号	時 期	類	王 朝 系																					
			編鐘	鏡	鼎	甗	鬲	簋	豆	尊	卣	壺	觚	觶	爵	斗	盃	壺	盤	旒	鉞	戈	小計	
BZM13 墓主	1 期	I		1	7	1		3	1	1	2		1	1	1	1	1	1	1	1	5	30		
BZM7 墓主	1 期	I	3		3			2		2	2		2	1		1				1	1		18	
BZM13 妾	1 期	II			2			1															3	
BZM7 妾	1 期	II			1			1				1		1									4	
BZM8	1 期	II			1			1		1	2			1	1							1	8	
BZM20	1 期	II			2			2														4	8	
BZM19	1 期	II			1			1														3	5	
BZM14	1 期	II			1			1														2	4	
BZM18	1 期	II			1			1														2	4	
BZM11	1 期	II			1																		1	
BZM6	1 期	III																					0	
BZM15	1 期	III																					0	
BZM16	1 期	III																					0	
BZM10	1 期	III																					0	
BZM4 墓主	2 期	I			4	1	1	2		1	1			2	1	1		1	1			3	19	
BZM4 妾	2 期	II			3		2	1						1									7	
BZM3	2 期	II			1			1														1	3	
BZM17	2 期	II												1									1	
BRM1 墓主	3 期	I	3		8	1	2	5	4	5	1	1		1	2	1	1	2	2	1	2	8	50	
BRM1 妾	3 期	I			5			4															9	
BRM2	3 期	I			6	1	3	5		1									1				17	
BZM9	3 期	II			2			2															4	
BZM5	3 期	III																					0	
BZM12	3 期	III																					0	
BRM4	3 期	III																					0	

1. 王朝系：青銅彝器を中心とする、西周王朝中心地で普遍的な遺物²⁵⁾

2. 四川系：三角援戈・尖底罐など、主に四川地域に起源を持つ遺物

3. 在地系：柳葉形短剣・平底罐など、強国墓地に特徴的な遺物

筆者は以前、晋国青銅器と王朝系青銅器との関係性について論じたが（角道 2007）、王朝系青銅器としてはその標準に張家坡墓地出土の青銅器群を設定している（中国社会科学院考古研究所 1999）。また、多くの長銘を持つ伝世青銅器も王朝系青銅器と見なしてよいものと思われる。この王朝系遺物には、強国墓地出土のほとんどの青銅彝器と一部の青銅武器が含まれる。西周期の青銅

宝鶏強人墓における葬礼の差異とその変化

表 7-2 強国墓地系統別出土遺物（四川系・在地系）

墓号	時期	類	四川系				在地系				
			三角援戈	明器戈	銅尖底罐	小計	劍	銅平底罐	浅盤器	曲柄斗形器	小計
BZM13 墓主	1 期	I	1	14	1	16	1	1	1	1	4
BZM7 墓主	1 期	I	3	10	1	14	1	1	1	1	4
BZM13 妾	1 期	II			1	1		1	1	1	3
BZM7 妾	1 期	II			1	1		1	1	1	3
BZM8	1 期	II	2	8	1	11	1	1		1	3
BZM20	1 期	II	1	6		7	1		1		2
BZM19	1 期	II		6	1	7	1	1	1	1	4
BZM14	1 期	II		6	1	7	1	1	1	1	4
BZM18	1 期	II	1	6	1	8	1	1	1	1	4
BZM11	1 期	II	1	3		4	1				1
BZM6	1 期	III			1	1			1		1
BZM15	1 期	III				0					0
BZM16	1 期	III				0					0
BZM10	1 期	III	1	2		3					0
BZM4 墓主	2 期	I	4	6	1	11	1	1	1		3
BZM4 妾	2 期	II			1	1		1	1	1	3
BZM3	2 期	II	1	5		6				1	1
BZM17	2 期	II				0					0
BRM1 墓主	3 期	I				0	2				2
BRM1 妾	3 期	I				0					0
BRM2	3 期	I				0					0
BZM9	3 期	II				0					0
BZM5	3 期	III				0					0
BZM12	3 期	III			1	1		1	1	1	3
BRM4	3 期	III				0					0

器副葬品組成として一般的な遺物であろう。

四川系遺物には、青銅製尖底罐、三角援戈、明器戈などが相当する。四川～漢中地域との関わりが強く、どれも在地生産されたと考えられる遺物である。強国墓地で発見される土器尖底罐が四川系の遺物であることは既に指摘されており、西江氏のⅤ群土器に当たる。青銅製尖底罐は現状では強国墓地でのみ出土する特徴的な青銅器であるが、土器尖底罐を模して作られたことは明らかであり、ここでは土器尖底罐との関係性から四川系の遺物と見なしたい。竹園溝墓地でⅡ・Ⅲ式戈とされる戈は別に三角援戈とも呼ばれ、その名の示すように三角形の援を持つ戈である。この三角援戈に関しては多くの先行研究が存在し²⁶⁾、西周王畿や殷墟などでも少数検出された青銅器であるもの

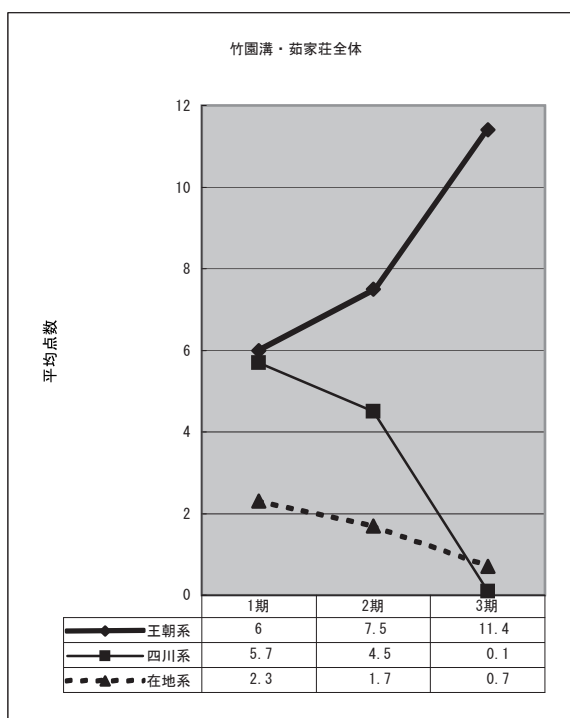


図 14 副葬青銅器系統の変化

の、多くの出土例は殷後期から西周前期にかけての四川成都、および漢中城固・洋県地域に集中している。これも四川系統の遺物の一つと考えて差し支えないだろう。明器戈は小型の戈で、実際には使用できないほど作りが脆弱なため副葬専用のミニチュアとされるものである。明器戈は武器としての役割は既に失われているが、三角援戈から変化して成立したと考えられるため²⁷⁾、これも四川系遺物と考える。

在地系遺物には、青銅短剣、青銅製平底罐、浅盤器、曲柄斗形器が相当する。青銅短剣は柳葉形と称される形のもので、西周期の遺物としては非常に数が少ない²⁸⁾。この短剣は後に巴蜀式青銅器の主要な器種として発展するものであるが、西周前期～中期にかけての出土例は強国墓地に集中しており、当地において柳葉形青銅短剣が成立したものと見なすことができる。青銅製平底罐・浅盤器・曲柄斗形器はともに現状では強国墓地に集中的に見られる青銅器であり、青銅製尖底罐と合わせてセットをなすことが多い。

強国墓地を構成する竹園溝・茹家荘の26基29人の墓から出土した青銅器について、攪乱を受けた墓を除いて王朝系・四川系・在地系のそれぞれに分類したものを表7-1・2に示した。表7をもとに時期別に出土点数を平均して各系統内における割合の変化を示したものが図14であり、さらに男女別・階級別に図示したものが図15である²⁹⁾。全体的な傾向として、四川系統遺物は2期から3期にかけて急激に減少し、3期墓では四川系統がほとんど見られなくなる。在地系は四川系ほ

宝鶏強人墓における葬礼の差異とその変化

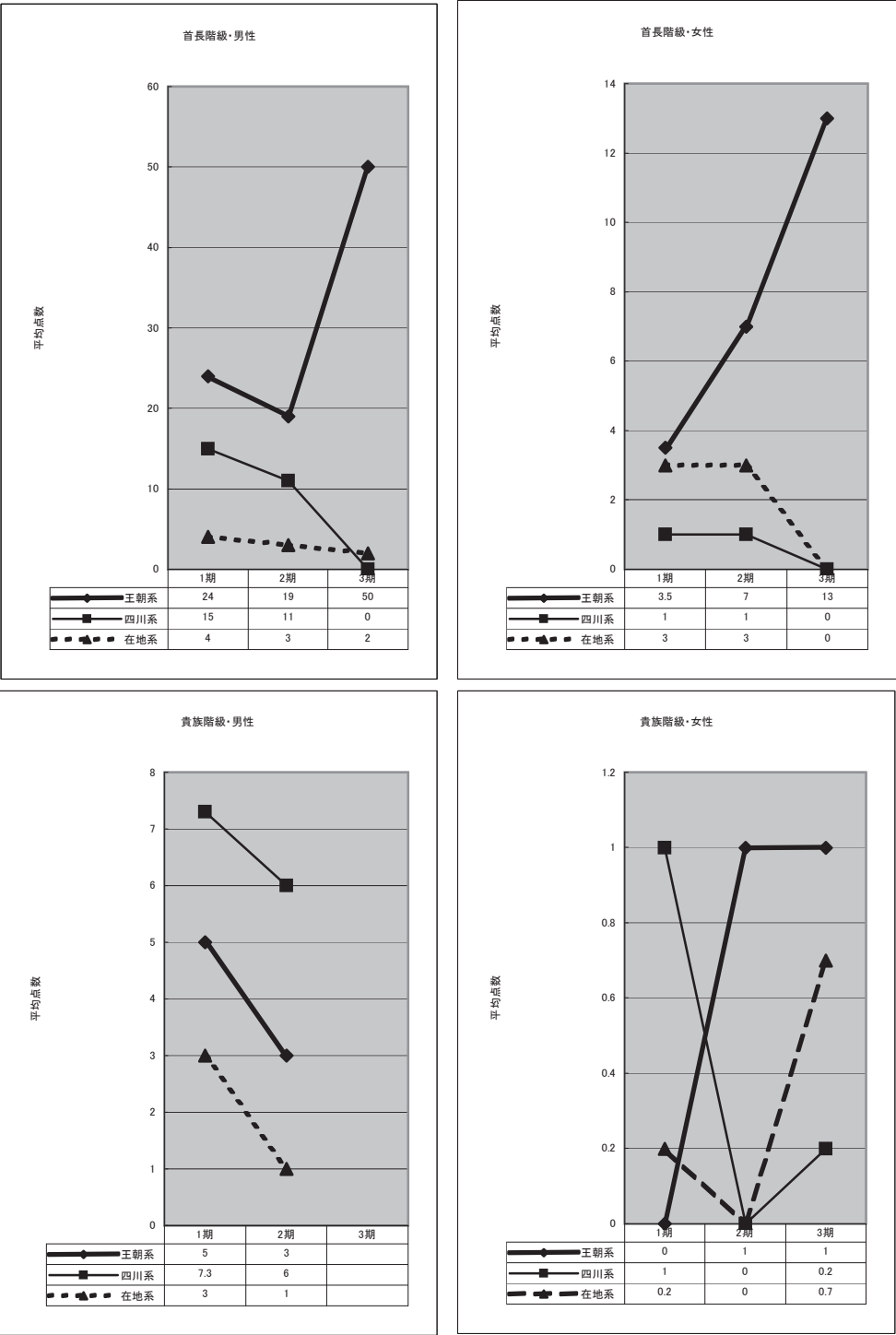


図 15 階級別・男女別副葬青銅器系統の変化

どの大きな変化は見せないものの漸次減少している。一方で王朝系は1期から3期にかけて増加しており、四川・在地系に替わり王朝系青銅器が強国青銅器の中心の位置を占めるようになってゆく。

図15からは、この変化を担った集団が首長階級であったことが読み取れる。3期における王朝系青銅器の増加と四川系青銅器の減少という傾向はそのまま首長階級男性墓においても同様である。四川系は武器が主体的な器種であるために首長階級女性墓ではその変化が読み取れないものの、王朝系の増加という点では男性墓に準じている。貴族階級男性墓では系統ごとの大きな変化は無いが、全体的に副葬青銅器自体が減少している点を指摘できる。また、1期から2期にかけての王朝系青銅器の増加は首長階級女性墓と貴族階級女性墓とで見られる現象で、これは女性の地位の相対的な向上を示しているものと考えられる。以上を総合すると、強国墓地では3期において西周王朝系の青銅器を多く副葬するようになるが、それは主に強国集団の指導的地位にあったと考えられる首長階級の人々によって担われたものであり、同時に女性墓では全体的に王朝系青銅器の副葬が増加していったと言える。

2期から3期にかけて強まる西周王朝の影響というものは、強国史の中でどのように位置づけられるだろうか。王朝系青銅器のうち、器種・型式ともに西周王朝の中心地と対応する青銅器群と、

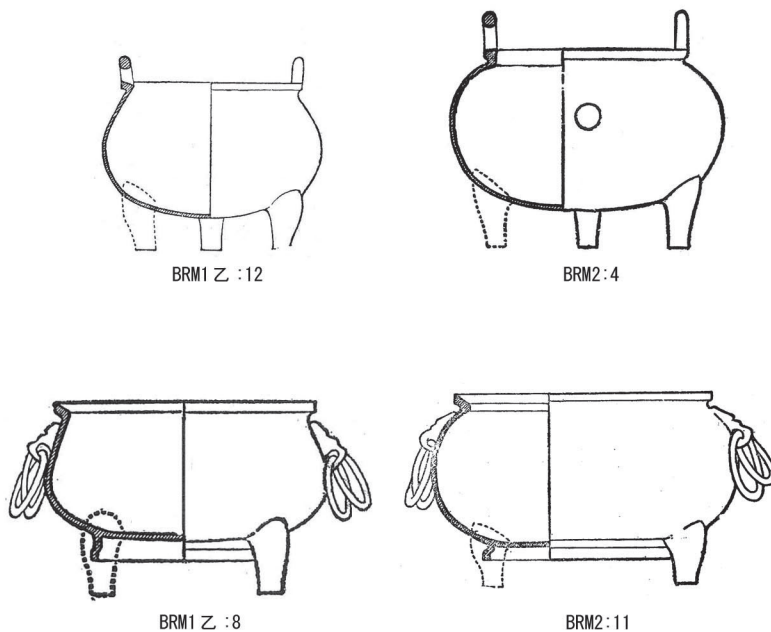


図16 茹家庄1, 2号墓出土の在地製と考えられる青銅器

王朝系青銅器の影響を受けて在地で生産されたと考えられる在地製王朝系青銅器群とを厳密に区別することは現状では判断が難しいが、西江氏が指摘するように在地製作の可能性が高い王朝系青銅器の出土例は強国 3 期の茹家荘墓地における首長階級の墓 (BRM1 墓主・妾、BRM2) に集中している (図 16)。3 期における王朝系青銅器の割合の増加は在地製王朝系青銅器の増加を反映したものであり、その主体が首長階級の集団であったということは、強国支配層が自らの体制内に王朝の礼制という権威を取り込もうとした姿勢の表れであると解釈すべきだろう。一方で女性墓における副葬品の変化という観点に立てば、この在地製王朝系青銅器の増加が、女性墓における青銅彝器副葬の豊富化を推進したという側面がある。2 期首長階級女性墓 BZM4 妾出土の青銅彝器からは在地製作のものをほとんど見出せないが、出土数がより増加した 3 期首長階級女性墓 BRM1 妾出土のそれは全てが在地製と指摘しうるものである。また、3 期貴族階級女性墓 BZM9 出土の 4 点の青銅彝器のうち 3 点は錫製であるが、これも在地製作の可能性が高いと思われる。2 期における女性墓副葬品の豊富化が真の王朝系青銅器の増加に起因しているのに対して、この 3 期女性墓における副葬品の豊富化が在地製王朝系青銅器の増加を主な要因として持つ以上、後者を直ちに女性の地位向上と結びつけることはできない。逆に言えば、3 期に在地製王朝系青銅器の製作が一般化することによって、女性墓においても王朝系青銅器を中心とする礼制を取り入れようとする動きが容易に達成されるようになったということは指摘できよう。

強国 1 期に竹園溝墓地で見られた埋葬の規則性は 2 期に崩れ始め、3 期には完全に見られなくなる。一方、強国墓地の遺物の系統性という視点に立つと、強国墓地は 2 期から 3 期の間に大きな変化が訪れたと言える。墓地造営と遺物系統の両面から見て、強国墓地の画期は 2 期と 3 期の間に求めることができそうである。そしてその変化は、西周王朝の影響を強く受けるものであり、強側が西周王朝の礼制を利用して支配体制を強化しようという試みであった。

茹家荘 2 号墓の被葬者は井姫なる女性で、茹家荘 1 号墓墓主である強伯の夫人だとされている。前述のように井姫を輩出した井氏は、西周王室と同じ姫姓を持つ重臣であった。この井氏と婚姻関係を結ぶという行為もまた、王朝の権威を志向した強集団支配層の意識の表れであると言えるのではないだろうか。

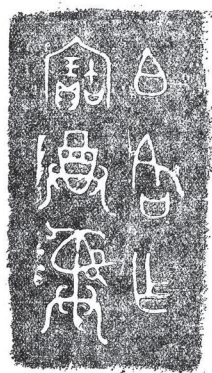
おわりに

以上、強国墓地の性格について再検討を行った。最後に、西周青銅器銘文からみた強の動向について検討することで本稿のまとめとしたい。

武者氏は西周時代の強集団史を青銅器銘文の点から概観する (武者 1999)。青銅器銘文中にしばしば見られる祭祀・儀礼・征伐などの、周王朝との服属関係を明示する記述が全く見られず、さらに昭穆王期以降に盛行する冊命金文³⁰⁾が無いことから、「強」族が周王朝と密接な縦の関係を持ち得なかったことを指摘する。強と周王朝との関係を銘文から考察した重要な指摘である。



1、紙坊頭(BZFM1:6)



2、竹園溝(BZM7:6)



3、茹家莊(BRM1乙:3)



4、茹家莊(BRM1乙:6)



5、茹家莊(BRM1乙:2)

图 17 弭国墓地出土青铜器铭文

松丸道雄氏は西周青銅器とその銘文の関係について、西周王室が王室工房で鑄造した青銅器を周囲に分配していたという基本的な青銅器分配の構造を明らかにした上で、青銅器自身とそこに見える銘文との観察から、周王室工房製作器、諸侯工房製作器と周王室作製銘、諸侯作製銘、諸侯改作銘などとの様々な対応関係が存在しうることを指摘した（松丸 1980a・b）。ここで強國墓地出土の青銅器銘文のうち、茹家荘出土の一部の青銅器銘文に見えるその特殊性について検討する。

図 17 は紙坊頭墓地出土青銅器銘文・竹園溝墓地出土青銅器銘文・茹家荘墓地出土青銅器銘文の一部である。紙坊頭銘文、竹園溝銘文、茹家荘一部の銘文（図 17-1～3）に見える字体に比べて、茹家荘出土銘文のうち図 17-4・5 の如き字体は非常に崩れており、この変化は前述の強國 3 期における変化と無関係ではあるまい。銘文作字者が文盲であったのか鑄造技術が劣悪であったのかは知る術が無いが、強側で青銅器銘文をも利用しようとした可能性が高いことは確かである。当該の青銅器銘文のなかに反転文字が散見されることも、当銘文がいかに文字理解に乏しい者の手によっているかを物語っている³¹⁾。在地製青銅器の判断のために、これら銘文要素もひとつの基準となりえよう。

強集団支配層はその 2 期から 3 期、すなわち西周中期にかけて青銅葬器と文字という西周王朝の礼制を取り入れることで、自らの支配を強化しようとした。そしてその試みは、3 期における首長階級墓と貴族階級墓の副葬品規模に表出した格差から見る限り、ある程度の成功を収めたようである。しかし、強集団の動向は茹家荘墓地廃絶以降、一切が不明である。おそらくは西周王朝の体制内に組み込まれその独自性を失っていったのではないかと推定されるが、西周王朝の関中平原内における動向については資料の増加を待って別に論じたい。

謝辞

本稿は 2006 年 12 月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。本稿の作成に当たっては大貫静夫先生から多くの貴重なご指摘を頂いた。また徐天進・王占圭・種建榮の各先生方には、発掘調査中にもかかわらず論文執筆の便宜を図っていただいた。各位に謹んで御礼申し上げます。なお本稿は、財団法人高梨学術奨励基金の平成 19 年度研究助成による成果の一部である。

〈註〉

- 1) 筆者は克殷の年代について前 11 世紀後半と考えているが、研究者によって諸説が存在する。克殷年代に関する詳細な議論については平勢氏の著書に詳しい（平勢 2001）。
- 2) 王朝としての「夏」を認めるか否かについては研究者により立場が異なる。より慎重な立場に立ち、文化名称としての二里头文化を以って呼称とする場合も少なくない。
- 3) 「強」は文献資料にも言及されずその出自が不明であり、西周王朝の構成員として封建を受けて成立した勢力と考えるには疑問が残る。むしろ当地の在地勢力が自ら「強」を名乗った可能性が強く、その点で当集団を諸侯と呼ぶのには語弊があり、またその墓地は強族墓地と呼ぶ方がよりふさわしい。しかし

ながら本稿では便宜上、墓地名称に限って「強国墓地」の呼称を用いることとする。

- 4) 虢季子白盤は既存の青銅器銘文著録中に確認できる。『三代吉金文存』、『两周金文辞体系図録考釋』など。
- 5) なお、竹園溝墓地と茹家荘墓地のほぼ中間に位置する濠峪溝墓地(図2)からも幾つかの西周時代遺物が検出されているが、墓地の詳細が報告されず遺物も多くが採集遺物であるため、今回の考察を加える対象からは除外した。
- 6) 字釋は基本的に『強国』の報告に従ったが、一部簡体字表記されているものを繁体字表記に改めた。また、書き下し文は筆者が作成したものである。〔 〕内は筆者が補った。以下同様。
- 7) 中国古代の大型墓は特徴的な墓道の形状を有し、墓室から東西南北に伸びる墓道を持つものを、その平面形が「亜」という字の古字に似ることから「亜字形墓」と呼ぶ。同様に、南北(あるいは東西)に墓道を持つ墓を「中字形墓」、墓道を一本のみ持つ墓を「甲字形墓」と呼ぶ。
- 8) 三点のうち二点(貞BZM7:6、貞BZM7:7)からは器・蓋にそれぞれ同銘が鑄されており、同銘自体は合計5銘存在する。同様に、BZM4出土の貞BZM4:1は器・蓋同銘で、銘文は計3銘である。
- 9) 『強国』では、その銘文に「鑿」と自銘することから当器は鑿とされるが、その形は盃と全く同じである。また、BRM1乙:18は器・蓋同銘である。
- 10) 「強」「彊」「彊」はどれも弓と魚に従う字であり、「彊」「彊」は「強」の異体字とされる。
- 11) 当該字を報告は「舟」と釋すが、当該字の右傍は一部に鑄潰れがあるものの、「口」に作り「舟」と釋すべきであり、従って当該字は、人に従い舟に従う「舟」字とすべきであろう。
- 12) 『強国』では、その銘文に「錕」と自銘することから当器は錕とされるが、その形は動物尊と同一である。
- 13) 茹家荘出土青銅器銘文の「井姫」であるが、その多くは「井」ではなく「井」に作られる。青銅器銘文中では「井」「井」を区別しないことも多いが、両者の関係については尚(1993)に詳述されている。
- 14) なお、BRM1甲室の被葬者については出土青銅器銘文の「兒」をその名と見ることができ(武者1999)、本稿でも当被葬者名を「兒」とした。
- 15) 西周時代青銅葬器の編年については林氏が体系的にまとめており(林1984, 1986)、本稿でも基本的な編年観は林氏の研究に従っている。また、銘文内容から西周王年が推定される青銅器を基準として、現状では西周Ⅰを武王期～康王期頃、西周Ⅱを昭王期～懿王期頃、西周Ⅲを孝王期～西周末と対応するものとして考えている。
- 16) 但し、西周王年との対応に関しては『強国』との間にズレが生じている。西周Ⅰ～Ⅲと王年の対応については註15参照。
- 17) 強国墓地出土土器の名称については基本的に西江氏の研究に従った(西江1993, 1994, 1999)。
- 18) 茹家荘1号墓(BRM1)は夫婦と考えられる男女が乙室と甲室とに別れて埋葬されるが、副葬遺物も同様に完全に分けて配置される。従って、当墓は、主体被葬者である乙室墓主と副次的被葬者である甲室墓主とを分けてその副葬品について分析することが可能と判断した。また竹園溝墓地の合葬墓では副葬遺物が二層台上に配置されることが多く、これらの遺物の帰属については報告書の判断に従っている。
- 19) 『強国』では合葬墓の出土人骨についてどのように性別の判定を行ったのか明確に記述されない。一部の人骨は性別と年齢について言及されているため、状態の良い人骨については鑑定を行ったものと思われる。一方で合葬墓以外の一部の単独墓では、青銅武器を出土するために男性であろう、とする記述があり、出土遺物からの男女判定も簡単に述べられている。しかしこの判定も、全ての墓について総合的になされておらず基準が曖昧である。江(2006)はBRM1における男女合葬の様相を詳細に検討し、青銅武器と青銅工具が男女を区別する基準になりうることを指摘したが、残念ながら竹園溝墓地に関する記述がほとんどなされていない。
- 20) BZM21は竹園溝墓地の北端に位置し、崖に削られた状態で発見された。
- 21) 但し、BZM2の南東側に未発掘墓が報告されており、BZM17はこの未発掘墓と対を成す可能性もある。
- 22) 紙坊頭1号墓(BZFM1)から「矢」銘を持つ青銅器が検出されている。この問題を詳述した論文としては、劉(1982)、盧・尹(1982)、盧・胡(1988)、田・劉・張(1994)などが挙げられる。

- 23) 「井（井）」銘は茹家莊 2 号墓（BRM2）から出土した青銅器に多く見られる。「井（井）」については、張長壽（1990）、張桂光（2005）などを参照。
- 24) 濛峪溝墓地からも寺窪文化系の遺物が複数確認されている（盧・胡 1988；西江 1999）。
- 25) ここでいう王朝系遺物には、王朝系遺物そのものと王朝系遺物の影響を受けて在地で製作されたと考えられる遺物（西江氏の在地系Ⅰ類）の両方を含むものとする。
- 26) 三角援戈に関する議論としては、李伯謙（1983）、盧・胡（1983a, 1988）、瀋（1993）、張文祥（1996）などに詳述されている。また、城固・洋県に関しては、唐・王・郭（1980）及び西北大学文博学院・陝西省文物局（2006）を参照。
- 27) 竹園溝墓地出土のⅢ式戈とされる戈の中には非常に矮小なものも多くあり、本来的な竹園溝Ⅲ式戈が縮小して明器戈が成立した過程を看取することが可能である。
- 28) 私見では、柳葉形青銅短剣は、殷末から西周前期にかけて北方系青銅短剣の影響を受けて当地で成立したものと考えている。西周前期における強国墓地以外の出土例としては、甘肅省靈台白草坡・陝西省岐山賀家村・陝西省禮西張家坡・北京琉璃河、などが挙げられるが（甘肅省博物館文物隊 1977；陝西省博物館・陝西省文物管理委員会 1976；中国科学院考古研究所 1962；中国社会科学院考古研究所 1999；北京市文物研究所 1995）、いずれも華北地域から出土している。その後、巴蜀系青銅器の一部を構成するに至ったことに関しては、多くの先行研究が指摘する通りである（西江 1987；段 1996；高 1998；李伯謙 1998；張天恩 2001）。
- 29) 平均点数を算出するに当たり、小数点第二位以下の値は切り捨てて計算した。
- 30) 西周中期以降の青銅器銘文には、王がその家臣にある役職への任命あるいは特定の任務を命じ、同時に物品を賜ったことが記述される例が多く存在する。この王の賞与に感謝して青銅器に銘文を鑄した（という体裁をとる）ものが一般的に冊命銘文とされる。冊命金文については、武者（1980）に詳述されている。
- 31) 例えば、茹家莊出土青銅器の銘文中には「乍」字を左右反転させて鑄したものが複数存在する（BRM1 乙：8、BRM1：乙 33 など）。青銅器銘文中の反転文字については松丸（1980a・b）を参照。

〈引用・参考文献〉

- 王光永 1980 「宝鶏茹家莊発現西周早期銅器」『考古与文物』1980(1)：13-15
- 角道亮介 2007 「西周時代晋国墓地の研究：晋国青銅器を中心として」『中国考古学』7：143-166
- 甘肅省博物館文物隊 1977 「甘肅靈台白草坡西周墓」『考古学報』1977(2)：99-130
- 高西省 1998 「試論西周時期的扁茎柳葉形短剣」『遠望集：陝西省考古研究所華誕四十周年紀念文集』上冊，陝西人民美術出版社、378-388
- 江瑜 2006 「宝鶏茹家莊西周強人 1、2 号墓葬所表現的葬礼、葬者身分与両性關係問題」林嘉琳・孫岩『性別研究与中国考古学』科学出版社、105-122
- 胡智生・劉寶愛・李永澤 1988 「宝鶏紙坊頭西周墓」『文物』1988(3)：20-27
- 尚志儒 1993 「西周金文中的井国」『文博』1993(3)：60-68
- 瀋融 1993 「試論三角援青銅戈」『文物』1993(3)：78-84、92
- 西北大学文博学院・陝西省文物局 2006 『城洋青銅器』科学出版社
- 陝西省博物館・陝西省文物管理委員会 1976 「陝西岐山賀家村西周墓葬」『考古』1976(1)：31-38
- 段渝 1996 「巴蜀青銅文化的演進」『文物』1996(3)：36-47
- 中国科学院考古研究所 1962 『禮西發掘報告』文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所 1999 『張家坡西周墓地』中国田野考古報告集考古学專刊丁種 57，中国百科全书出版社
- 張桂光 2005 「周金文所見“井叔”考」陝西師範大学・宝鶏青銅器博物館『黃盛璋先生八秩華誕紀念文集』

中国教育文化出版社、176-178

- 張長壽 1990 「論井叔銅器：1983～1986年澧西發掘資料之二」『文物』1990(7)：32-35
- 張天恩 2001 「中原地区西周青銅短劍簡論」『文物』2001(4)：77-83
- 張文祥 1996 「宝鷄強国墓地淵源的初步探討：兼論蜀文化与城固銅器群的關係」『考古与文物』1996(2)：44-49
- 田仁孝・劉棟・張天恩 1994 「西周強氏遺存幾箇問題的探討」『文博』1994(5)：15-25
- 唐金裕・王壽芝・郭長江 1980 「陝西省城固県出土殷商銅器整理簡報」『考古』1980(3)：211-218
- 西江清高 1987 「春秋戦国時代の湖南、嶺南地方：湘江・嶺南系青銅器とその銅劍をめぐる」『紀尾井史学』7：10-36
- 西江清高 1993 「西周式土器成立の背景 上」『東洋文化研究所紀要』121：1-136
- 西江清高 1994 「西周式土器成立の背景 下」『東洋文化研究所紀要』123：1-110
- 西江清高 1999 「西周時代の関中平原における『強』集団の位置」『論集 中国古代の文字と文化』汲古書院、207-244
- 林巳奈夫 1984 『殷周時代青銅器の研究：殷周青銅器綜覧一』吉川弘文館
- 林巳奈夫 1986 『殷周時代青銅器紋様の研究：殷周青銅器綜覧二』吉川弘文館
- 平勢隆郎 2001 『よみがえる文字と呪術の帝国 古代殷周王朝の素顔』中央公論新社
- 平勢隆郎 2005 『中国の歴史 02：都市国家から中華へ 殷周・春秋戦国』講談社
- 北京大学考古学系商周組・山西省考古研究所 2000 『天馬一曲村 1980 - 1989』科学出版社
- 北京市文物研究所 1995 『琉璃河西周燕国墓地 1973 - 1977』文物出版社
- 宝鷄市茹家莊西周墓發掘隊 1976 「陝西省宝鷄市茹家莊西周墓發掘簡報」『文物』1976(4)：34-56
- 宝鷄市博物館 1983 「宝鷄竹園溝西周墓地發掘簡報」『文物』1983(2)：1-11、90
- 宝鷄市博物館・渭濱区文化館 1978 「宝鷄竹園溝等地西周墓」『考古』1978(5)：289-296、300
- 松丸道雄 1980a 「西周青銅器製作の背景：周金文研究・序章」『西周青銅器とその国家』東京大学出版会、11-136
- 松丸道雄 1980b 「西周青銅器中の諸侯製作器について：周金文研究・序章その二」『西周青銅器とその国家』東京大学出版会、137-184
- 武者章 1980 「西周冊命金文分類の試み」松丸道雄編『西周青銅器とその国家』東京大学出版会、241-324
- 武者章 1999 「西周『強』史研究」『論集 中国古代の文字と文化』汲古書院、245-268
- 李伯謙 1983 「城固銅器群与早期蜀文化」『考古与文物』1983(2)：66-70
- 李伯謙 1998 「商周青銅短劍發展譜系の縮影」『中国青銅文化結構体系研究』科学出版社、24-30
- 劉啓益 1982 「西周矢国銅器的新發現与有関的歴史地理問題」『考古与文物』1982(2)：42-46
- 盧連成・尹盛平 1982 「古矢国遺址、墓地調査記」『文物』1982(2)：48-57
- 盧連成・胡智生 1983a 「宝鷄茹家莊、竹園溝墓地出土兵器的初步研究：兼論蜀式兵器的淵源和發展」『考古与文物』1983(5)：56-65
- 盧連成・胡智生 1983b 「宝鷄茹家莊、竹園溝墓地有関問題的探討」『文物』1983(2)：12-20
- 盧連成・胡智生 1988 『宝鷄強国墓地』文物出版社

<図の出典>

図 14・15 を除き、本文中に利用した図は盧・胡（1988）から引用した（図 13：一部改変）。
図 14・15 は筆者作成。

Difference and Change in Burial Rituals : A Study on Baoji Yu Cemeteries

Kakudo Ryosuke

This paper analyzes the bronze ritual vessels excavated in Yu cemeteries and investigates the relationship between Yu people and the Western Zhou dynasty.

The bronze ritual vessels show that the chronological sequence of Yu tombs can be divided into three phases(Phase I -III), and the difference among these tombs indicates that Yu cemeteries consist of four types of tomb distinguished by gender and classes; the ruling class and the upper class. In Phase I , the arrangement of the Yu tomb was completely regular, however, this pattern disappeared from Phase II downward. The bronzes in Yu cemeteries are also divided into three types; Zhou dynasty bronzes, Sichuan bronzes and original bronzes. The change in the amount of these bronzes shows that Sichuan bronzes decreased throughout all phases and Zhou dynasty bronzes increased in Phase III. It is concluded that these changes in Phase II and Phase III resulted from Yu rulers' intention of adopting a ritual system of the Western Zhou dynasty.